エコのもりシンポジウム2005

持続可能な社会は『森の生活』から

～「観察」と「実践」ソローのメッセージ～

報告書

エコのもりセミナー

2005年2月17日、【エコのもりシンポジウム2005　持続可能な社会は『森の生活』から～「観察」と「実践」ソローのメッセージ～】を開催いたしました。これは第2期エコのもりセミナーの最後のシンポジウムです。つまり、足掛け7年の事業であるエコのもりセミナーの最後のメッセージとなります。このシンポジウムのテーマとして、アメリカのナチュラリスト、ヘンリー・D・ソローの名著『森の生活』を取り上げました。この報告書は、そのシンポジウムをまとめたものです。

目次

基調講演　『森の生活』からソローが見つけた三つのヒント
今泉吉晴（都留文科大学教授）

問題提起　真に持続可能な社会とは何か？
稲本　正（オークヴィレッジ代表）

ディスカッション　私たちの暮らしと社会をどう観察し、どう変化させてゆくか？
～ソローが考えたようなことを150年たった今、私たちが考える～
今泉吉晴（都留文科大学教授）
稲本　正（オークヴィレッジ代表）
澤田裕二（株式会社SD代表）

ソローとは？

ヘンリー・D・ソロー
Henry David Thoreau

1817年、アメリカ・マサチューセッツ州生まれ。散歩好きのナチュラリストであり、詩人であり、文学者、思想家でもある。『森の生活』『市民の反抗』『原則のない生活』『歩く』などのエッセイを数多く書き残す。いずれの著作も自らの実践と観察、思索から生みだしている。1862年没。

ソローの著作を片手に、マハトマ・ガンジーはインドを独立させ、マーチン・L・キング牧師は黒人差別反対運動をすすめた。また、レイチェル・カーソン、ジョン・F・ケネディ、フランクロイド・ライト、アーネスト・シートン、ジョン・ミューア、ゲーリー・スナイダーなど、分野を越えて様々なリーダーに強い影響を与えたことでも知られている。多くの作品を通してソローが提起している問題はきわめて現代的で、時代や国家のへだたりを感じさせない。国家と個人のかかわり方、地球環境の保全、自然と文明の共存、情報化社会の到来、拝金主義がもたらす人の心の荒廃といった、いわば全人類的な課題が先取りされ、問題の根源までさかのぼって、根本的に検討されている。

『森の生活』とは？

『ウォールデン —森の生活—』
Walden;or,life in the woods by Henry D. Thoreau

1854年に出版されたソローの代表作。27歳の青年ソローが、ウォールデン湖畔の森に丸木小屋を建て、自給自足の暮らしを試みた2年2ヶ月の生活記録。単なる「隠遁生活のすすめ」ではなく、環境を考える上での世界的必読書として知られている。日本でも明治時代から多くの翻訳本が発行されている。

『森の生活』からソローが見つけた三つのヒント

今泉　吉晴

はじめに

ソローは、アメリカのマサチューセッツ州のコンコードという小さな村で、里山といっていいと思うのですが、近郊の森に入り、2年余り暮らしています。このシンポジウムのテーマは、ソローの名著、『森の生活』(p.1参照)にヒントを得て、これからの社会を考えていこうということです。そこで私は、ソローの考えを紹介する役目を担っているのだと思い、基調講演のテーマを「『森の生活』からソローが見つけた三つのヒント」にしました。しかし、これは非常に大きなテーマであり、また、150年ほど前の時代を生きた人の考えたことですので、はたして現在の社会に通用するものなのかどうかということもありますし、ソローの『ウォールデン』から学ぶといっても、いろいろな障害があります。それをどう乗り越えてソローについて紹介していくかということが、私の役目ということになります。

しかし、50分で全部を紹介できませんので、まず、私がどうして関心を持ったかということをお話しするために、私自身の森の生活について少し触れます。そのあと、講演資料(p.9)を参照していただきながら話を進めさせていただきたいと思います。資料を紹介するだけでも時間をオーバーしてしまいそうですが、この問題は案外難しい問題なのです。

明治以来、たくさんの方が『森の生活』を訳されていて、私は15～16点かと思っていましたが、今日うかがいましたら19点の訳があるそうです。難しさの一つは、翻訳が難しいことで、こういう場所で、誤訳があるということを、あまり立ち入って言うわけにもいかないのですが、考えてみますと、私たちは外国の文化を日本語に訳しながらとり入れていかなければならないといので、これは『森の生活』に限ったことではありません。あらゆる外国の文献の翻訳は難しい問題をはらんでいます。今回、私は『森の生活』を訳させていただき、去年の4月に刊行されましたが、そのなかでたくさんの解釈の違いが見つかりまして、これは今まで読むのが難しかっただろうと思うこともありました。

また、ソローが生きた150年前は、今の日本と違って経済成長の具合はどうだったのだろう、きっとのんびりした時代だったのではないか、と考えたりします。しかし、150年前のアメリカは案外大変な時代で、有名な話では、カリフォルニアのゴールドラッシュが1849年で、だれもかれもがカリフォルニアに向かって大移動をしています。それは日本の今の状況に近いというより、もっと激しい変化があった時代ではないかとさえ考えられます。そういったこともある程度理解しないと、なんでソローはあの時代に森の生活をして社会と自然を観察したのだろうということは、ちょっと想像しがたいところがあります。

ソローが住んだのは里山だったというご指摘がありましたけれど、これも個人的に20～30年解けないナゾでした。ソローが住んだのはコンコードの町から1マイルぐらい離れた森の中で、1840年代のアメリカにとって1マイルという距離はほんの一歩で、ほとんど問題にもならない近い場所です。1880～90年代の西部劇の時代でも、普通の人が100キロぐらい歩くことは日常的に行われていて、100マイル歩く人もいたといいますから、そのときに1マイルだけ森に入っていったい何をしたのか、それは森と言えるんだろうか、という疑問まで生まれたこともあります。

そういうふうに「ソローがどうして森の生活をしたか」ということについては、よほどきちっと考えていかないと、いろいろな誤解を生みます。森にたった1マイル入って、何をしたかということをソローはカッコつけてしゃべっているんじゃないか、と考えることすらあるだろうと思います。カリフォルニアまで東部から出かけていく時代に、非常に田園的なのんびりした話ではないか、と思うこともあるでしょう。そういった状況とか事件とか背景も含めて、ソローのしたこと、考えたことを紹介させていただきたいと思います。

『森の生活』の【耳よりな話】の文章そのままに即して、実証的にソローの考えたことをお話ししたいと思いまして、私の選んだ一文(p.9)を参考に、章を追って紹介させていただきます。そして、具体的にソローが考えたこと、見たことに即して、この問題を考えてみたいと思っています。

まず、私自身の森の生活を、ほんのちょっとだけ紹介させていただきまして、そのあと、『森の生活』を見ながら、ソローの考えたこと、楽しんだことをいろいろご紹介し、最後に、今日のテーマである「持続可能な社会は『森の生活』から」ということで、ソローの「観察と実践」はどういうものであったかというようにまとめさせていただきたいと思っています。

今泉 吉晴　都留文科大学教授

1940年東京生まれ。東京農工大学獣医学科卒業。理学博士。20年前、山梨県都留市の森に小屋を建て、移住。岩手県の山林にも山小屋を持つ。渓流を眺め、植物の手入れをしながら森の小さな哺乳類たちの暮らしに自らも関わるという方法で、彼らの生き方の謎を研究している。著書に『がんばれひめねずみ』(新日本出版社)、『空中モグラあらわる』(岩波書店)など多数。翻訳書に『ウォールデン　森の生活』(小学館)、『シートン動物誌』(紀伊国屋書店)、『文明にとらわれた動物たち』(思索社)などがある。ヘンリー・D・ソローの生き方を描いた絵本『ヘンリー　フィッチバーグへいく』『ヘンリー　いえをたてる』(福音館書店)の翻訳もある。

私の森の家

私は山梨県都留市の山間に小屋をいくつか持っています。ソローは小屋とは言わず、「家」と言いますが、私も「家」と言いたいと思います。

私の森の家は斜面の下の小さな谷間に建っています。2階は1畳に満たない、ムササビのための部屋です。下は私の住み場所ですけれども、ノネズミが自由に入ってこられるようになっています。木の上に住むムササビ、地表を徘徊するリス、ノネズミ、地下のモグラの「ムリネモの家」と言っています。そういうところで暮らしたいと思って、ときどき暮らしてみたのですが、私の場合、そこに住む決意がなかなかつきませんでした。3回ばかり、大学を辞めて、ここに住もうと思ったのですが、そのたびに連れ戻されてうまくいきませんでした。個人的なことですが、去年、『森の生活』を訳して、翻訳の作業は5年ぐらいかかりましたけれど、その間、ずっと考えて、何回も推敲して、訳注をダーッとつけて、よくよく考えて、「読めた」という感じがしました。それで、今年は大学を辞めてここに住みつこうと思っています。

今日のテーマは「現代の非常に危機的な状況に対して、どう生きるか」という問題だと思いますが、そう簡単に物事を決意することはできません。ソローの場合、森の生活に入ったのは27歳のときですけれども、ハーヴァード大学を卒業した20歳のときから、すでに、そういうことをしたいと相当熱心に深く考えていたようです。卒業の式典のときに、キリスト教社会では1週間のうち日曜日だけ休みをとるけれども、自分は逆に生きると宣言したそうです。それが森の生活を求める決意の表明であったわけです。しかし、7年間の準備期間がありました。私の場合は、子どもの頃からそういう暮らしをしたいと思っていまして、いろいろなときにいろいろな決意をしましたけれども、結局、納得がいくまでに非常に時間がかかりました。

では、森の家で何をしているか、ちょっとだけお伝えしたいと思います。

山梨県都留市は人口3万の小さな田舎の町ですが、私はそこで暮らしていて、いろいろな友人がいます。私はよく東京に出てくるものですから、町の人たちは、こいつは都留に住んでいるのか、いないのかと私を疑っていますが、仕事の都合上、どうしても東京に出てこなければならないので、そうしているだけでして、私自身は田舎の住民で、地元の方と懇意にして、こういう会とか学会に出てくるよりも地元の方とつきあっていたほうがおもしろいという、ソローの心境になりました。べつにソローから教えられたからではなくて、自分でそう思いました。

懇意にしている方が、ツバメが落ちていたとか、いろいろな拾い物をしてきてくれます。ときどき決意を要するような拾い物がありまして、2002年にムササビの赤ちゃんを拾ってきた人がいます。山の奥ですし、どこで拾ったのかもわからないので、元のところに返すわけにいかず、飼うことにしたのです。

飼うということは、ペットを飼うのと同じで、十分に愛情を注いで、自分の体から離さない。赤ちゃんを放って会議なんかに出ていたら、死んでしまうか、体調を崩します。そういうことを人間はしょっちゅうやっていますが、そういうことでは育たない。ですから、私はムササビを飼う場合には会議はボイコットします。そうしなければ良い関係はつくれません。

そうすると、これはソローとも関係しますが、ただ赤ちゃんを見ているだけで育児の仕方がわかってきます。今日のテーマの「観察」です。動物園の飼育係の方から教わらないほうがいい。間違ったことを教えてくれることがあります。たとえば、ミルクの濃度がどうだこうだ、牛乳では薄すぎるからどうしろ、などといろいろなことを言います。しかし、そういうことは肝心ではなく、いつも一緒にいて、様子を見ていることが大事で、きちっと見ていますと、下痢をさせずにちゃんと育てることができます。私はそういう確信を持っています。飼っているときは、学生に実況放送をしまして、私が飼う場合には絶対に下痢はさせない、絶対に生かしてみせる、と責任をもって育てていきます。

そうすると、とてもかわいくて、タオルでお尻をなでるとおしっこをします。そのあとミルクをやって、満腹になると安心して寝入ります。この時期は私の手の上で寝てくれます。こういう関係をつくっていくと順調に育っていきます。

山小屋暮らしですが、（上のほうに引っかけた）私のリュックにムササビは自分の寝床をつくっています。ここは決して侵してはならない場所です。ペットを飼うと、人間の都合に合わせて動物たちの寝場所を定めようとしますけれども、そうすると動物たちの暮らしは直ちにメチャクチャになります。たぶん人間の赤ちゃんもそうだろうと思います。あなたのお家はここよ、この部屋で過ごしなさい、一人で寝なさい、ということを、赤ちゃんの意思に反してやれば、必ず傷が残ります。野生動物の場合、そういう傷を残したら最後、なついてくれません。私は親ではありませんので、赤ちゃんがすべてのカギを握っています。人間の赤ちゃんならまだしも、ムササビの赤ちゃんに対して、どうしていいかわからないわけです。ですから、赤ちゃんの要求をよく見てやります。

そうしますと、だんだん高いところが好きになります。最初は私の掌でもよかったのですが、成長していくと、上に行かないと落ち着かないということになります。

ムササビが初めて高い木に登って、おしっこをしました。一人前のすぐ手前になりますと、高いところに登らないと、おしっこをしません。「してはいけない」という命令が本能からくるのだと思います。ですから、我慢をして、おもらしをするようになります。狭い部屋で飼っていますと、高

くて気持ちのよい場所がないので、そういうサインから、はたしてこの子は何を望んでいるのかということを察知していくわけです。樹上生の動物ですから、当然、木の高いところに行ったら気持ちよくおしっこをするのではないかと考えられます。そのとおりで、私のところに必ず戻ってくるという関係ができたときに初めて木の上に放しました。これができるようになると、便秘も止まります。

ところが、馴れてしまったムササビはペット化し、野生のムササビは地面に降りないものですが、平気で森の地面を散歩するようになります。地面に対する本能的な恐怖を自分で引き出してくれるかというと、いつでもそうできるわけではありません。これをどう解決するかということは、非常に難しい問題です。人間もそうですが、飼われるという文明化された状況で育った野生動物が、どういうふうに本来の自分の性質を本能から呼び覚まして身につけていくかということが、非常に大きなテーマになります。人間が飼った野生動物の場合、必ずその重荷を背負うことになります。

これが、ソローが『森の生活』のなかで提起している問題でして、文明人は、こういう環境の中で居心地よく講演を聴こうとか、そういうふうにすぐ考えますが、「自己家畜化」といいまして、自分自身が家畜になっていきます。私も実際にそうで、都市的な暮らしをしていれば太ってきますし、いろいろな問題が起きます。いちばん大きな問題は、文明化した状況が精神の成長に影響するということです。

野生動物の場合、人間に飼われるとそれが顕著に現れます。ムササビの場合、地面を平気で歩きますので、大きくなったから放そうというわけにいかなくなります。それでは、野生をどうとり戻すか。それはソローの『森の生活』にも「もっと野生的に生きよう」とか「自由に生きよう」というようなことが出てきますが、そのときの自由は野生という意味です。ところが、もし人間が調教して、カラスは危ない、キツネは危ないと教えるとしたら、200も300も教えなければならず、受験勉強になってしまいます。受験勉強は文明化された学習のひとつの形態でして、いっぺんに200も300もある敵を覚えさせなければ野生にはならないのです。

では、どうするかというと、彼らの生活のリズムを尊重すると、あるとき、夜と昼の区別をはっきりつけるようになります。イヌを散歩に連れ出そうとすると、ものすごく喜びます。引き綱をつけて、玄関から車が走っているところに飛び出したりします。自分で散歩の時間を決めて、その時間にならなければ出ていかないということは、ほとんどないと思います。しかし、ムササビはだんだん空の暗さを見るようになります。家から早く出すぎたときに、屋根にとまって空を見て、暗さが「これでよし」と思えるまで飛んでいきません。尾を後ろから上げて、顔の前までかぶせて、隠れたつもりでいます。ときどき尾を外して空を見て、時間の調整をしています。こういうときに、「いいから、こっちへ来て遊べ」などと干渉しなければ、そういうことを大事にするようになりまして、同時に、昼に聴こえるカラスやヒヨドリの鳴き声に、危ないと警戒するようになります。そうやって本能を呼び覚まし、しだいに野生動物としての自分を育てていくことができるようです。

「森の動物たちがどういうふうに自分をつくっていくのか」ということが、私が今、研究していることなのですけれども、そんなことをやりながら、ここでもっと暮らしたいなと思うようになりました。昔も月単位では何回も森の家で暮らしたのですが、これからは全部森の中で暮らしたいと思うようになりました。そのきっかけが、『森の生活』を読めたという経験です。そこで、どういうふうに読めたのか、ということを紹介させていただきます。

『森の生活』より耳よりな話を一章一文

ソローの文章は、非常に抽象的で貴い話がある一方で、非常に野生的で残忍な場面とか世俗的なことなど、いろいろなことが出てきます。各章とも、そのすべてが入り交じって美しく進んでいくところがこの作品のすばらしいところだと思うのですが、普通の本のように、論理的に展開して、黙っていてもすべてが頭のなかに入ってくるというようにはなっていません。本人もそういうふうに書いています。説得的に書くことは、環境教育のなかでも大きなテーマで、10分間で環境はすばらしいということを伝えられたら、それはすばらしいことです。しかし、そうはなっていない、なかなかわからないものだとソローは主張しています。今日はそのことにはあまり触れませんけれども、そういうつくりになっていますので、普通の本を読んだ目には話があちこち飛びすぎてわかりづらいと思います。

そこで、全編を通してどんなことが言われているかということは、十八章の各章を一文で見ていきますと、全体の姿が割合クリアに出てくるとか思います。ソロー自身、『森の生活』を皆さんにぜひ読んでもらいたい、自分が発見した“耳よりな話”を伝える文章なんだと言っています。実際、非常に耳よりな話がたくさん出てきます。

一章　経済

「私は五年を越える歳月を自分の手で働いて生きた経験から、年に六週間ほど働けば、暮らしに必要なあらゆる代価をまかなえることを発見しました」

ハーヴァード大学の卒業式で、自分は1週間のうち1日だけ働いて、ほかの日は休み、その間、自分の感覚を十全に働かせて、森や人間社会の観察をする、と言いました。それを年に換算した数字です。森の生活をした2年余りを含めての5年の実験で、言葉どおり自分で食べ物をつくって生きています。これが彼の言う経済です。

『森の生活』からソローが見つけた三つのヒント

人間は、そんなにものすごく働かなくたって生きていける。これは当たり前のことです。野生動物や植物の暮らしは大変なように見えますが、それでも人間ほどは働いていません。人間はちょっとずるい動物でして、野生動物や植物の裏をかいていくらでも資源をとってこられるわけです。ですから、人間という生き物を自然界と一緒に生かすのだったら、1週間に1日ぐらい働けば生きていけるだろう、実際にやってみたらそのとおりだった、というわけです。こんなに耳よりな話は少ないだろうと思います。私の手応えでも、そうだろうと思います。病気になったときはどうするんだと言われますが、これについても、『森の生活』のなかでは、間接、直接に答えています。そういったことも考えたうえでの彼の結論です。

一章の なかに「聖なる自然の楽しみは空へと霧散しているではないか」とあります。私たちは、こういう部屋に入っていて、一見、安楽ですけれども、空が見えて、風が吹いていたら、どれほど楽しいかと言っているわけです。やればやるほど、こういう世界から遠ざかっている。ですから、ものをつくるために働くことは、どういう意味を持つかということも考えなければなりません。私は、初めてこんなすごい講義室を見まして、パワーポイントの映像がこんなにきれいに映るところは、今まで経験したことがありません。けちをつけるわけではなくて、そういうふうに考えれば、働くということについて、もうちょっと楽になるのではないかということをソローは指摘しているのだろうと思います。やればやるほど自然の楽しみがどこかにいってしまう。自然の楽しみとは、きれいな空気を吸う、雪が溶けていくのを見る、といったことですけれど、それが減っていくと指摘しています。

第一章で、経済、暮らしをどう立てるかということを、非常に丁寧に論証していますので、全体のなかで、第一章は非常に長くなっています。

二章　どこで、なんのために暮らしたか

「私が森で暮らそうと決めたのは、暮らしをつくるものとの事実と真正面から向き合いたい、と心から望んだからでした」

人生、どこで暮らしたらいいか。経済はこういうふうに解決した、人間はそういうふうにできているとわかった以上は、楽しい場所がよいに決まっています。駅の近くはうるさくてしょうがない、森の中がよいに決まっているというのですが、森の中がよいというのは、問題を整理するのにはっきりするというだけのことです。文明の要素が消えるため、いろいろと戸惑うことが少ないという意味なので1マイルでよかったわけです。いろいろな煩わしさから離れるということで、二章は、人間は人生のある時期に、どういう場所に住みたいか、ということを考えるものだということです。

私もしょっちゅう考えまして、電車の窓から森の谷川などが見えますと、ぜひ住んでみたいと思いました。そして、そういうものをどんどん手に入れまして、実は10カ所も20カ所もそういう場所を持っていますけれども、そこで暮らす時間がない。つまり、一章をちゃんと実践していないというのが私の立場です。

三章　読書

「いったいどれほどの数の人が本に親しむことを通じて、人生を開いたでしょうか。本が、生きることの不思議をとき、新しい生き方を暗示しました」

全部、自分の気持ちに聞いていくということで話が続いていきますので、三章はそういうことについて古典は何を言っているか、ということで読書をしています。すばらしい本はたくさんありますが、ここでのポイントは古典です。彼は古典の言葉をきちっとできるのですけれども、プラトンは読み通していないと告白しています。現代の優れた本がいちばんよいと言っていまして、けっこうミーハーだなと思いますが、そういった本から学んでいったらいいだろうということです。

四章　音

「文字ばかり読んでいては、世界のあらゆる物と出来事が、じかに私たちに語りかける言葉であることを忘れます。物と出来事こそが最高に豊かな言葉であって、私たちの標準語です」

四章は、元に戻って古典をチェックし、それはそれで大事だけれども、身の回りのざわめきとか風の音のほうが、世界について多くを知らせてくれるということです。言葉になっているものよりも、現実世界の身近な現象に絶えず気を配る。散歩の楽しみはそれですね。私たちはイヌの散歩に出かけますけれども、しばしばイヌは楽しんでいるのに人間のほうは楽しめない。イヌの散歩は退屈だと思う人がいるくらいでして、そういう意味で、ソローの言うことを実践するのは非常に難しいであろうと思います。「物と出来事こそが最高に豊かな言葉であって、私たちの標準語です」ということで、感覚を使おう、感覚を楽しませよう、というのがこの章です。

五章　独り居

「自然にも、私が親しみ、使い込んで自分のものにしているところ、いわば自然から奪って私のものにした領域があります。ではなぜ、私はこの数平方マイルにもおよぶウォールデンの森を、自分が動き回る領域として手にしていられるのでしょうか？」

五章では、独りで暮らすことがいいでしょうということで、独りの楽しさのなかで発見したことを書いています。独りで森の家にいると訪問者があります。たとえば、親友が訪ねてくれますので、独りでいることは、かえって友達とよい関係をつくる。よけいな会議などはないということになります。

六章　訪問者たち

「私の森の家には椅子が三つありました。ひとつ目は独り居のため、ふたつ目は良き友のため、三つ目はみんなのためでした」

本当に必要な人たちだけが集まってくる。孤独、独り居を経験するなかから、より高い社会性に目覚めていくというのが六章です。

七章　豆畑

「豆作りは、ほかに得がたい楽しみで、私は放蕩になりそうでした。私は畑に肥料を施さず、絶えず鍬を入れ続けるようにしました」

家をつくったり、いろいろなことをする一方で、自分が食べるための豆の畑をつくる経験が語られます。当時、エコロジーという言葉ありませんが、七章は非常にエコロジカルな章になっています。「秋に収穫する豆とは、本当には誰のものでしょうか？」と書いています。豆作りはあまりに楽しくて放蕩になりそうだと書いていますが、そこから学んだものは「太陽から見れば、大地のすべてがみごとなエデンの園です」ということで、太陽や雨が育てたものを人間がひとりでとっていいのか、という章になっています。

こういうふうに続いていきますが、どの章も自分の経験だけで書かれています。古典からの引用は、自分の問題を論証するために使っていません。ほとんど自分の経験を語って結論に到達するのがソローの本の特徴だと思います。

八章の「村」の一文は、省略します。

九章　池

「人間社会とゴシップにつかれると、私は散歩を西へ進め、“新しい森と初めての草地”を訪れ、夕方にはフェア・ヘーブン丘に向かいハックルベリーとブルーベリーの食事を楽しみ、数日分の貯えをつくったりしました。これらの野生の果実の風味は買って食べる人や、市場のために栽培する人には知りようがありません」

九章は、楽しい自然とのつきあい、観察です。散歩しながら野生の果実をとって食べる。結果だけを求めるなら、都会の果実屋さんからも野生の果実を買うことができますが、それを得るまでの散歩とか美しい経験を含めて食事をすることが、人間として生き、食べるということの本当の意味です。どうせ生きるなら、というのは変ですが、生きる以上は、そういったすべての楽しみを楽しみたいと、「池」の章は自然の楽しみを代表しています。

一〇章　ベイカー農場

「時に私は、マツの森へぶらりと散歩に出ました。私の目にマツの森は、壮麗な異教の寺院に見え、あるいは大海原をゆく、帆をいっぱいに広げた商船隊に見えました。堂々たるマツの太枝が風にゆれ、太陽の光を受けてきらきらと輝くさまがあまりにもみごとでした」

一〇章の「ベイカー農場」は、あとから来たアイルランドの移民の方たちが安い賃金で湿地を開発して農地にしていますが、それはどういう意味があるかということを問うわけです。ここは、ソローの「観察から実践へ」というところです。開発の行為、自然の楽しみ、豊かさが失われていくことに対して、どうするかということです。

ここで実際行動をいろいろするわけですが、より深く自分が判断できて、自分の言うことが正しくて、ほかの人が間違っているということを、ある程度言えるのはどうしてかということを森の暮らしのなかで探求していきます。それが一一章の「法の上の法」です。

一一章　法の上の法

「私は、多くの人と同じように崇高さを求め、精神的に豊かに生きたい、と望む本能が働くのを意識しています。私は、一方で野生の本能が働くのを感じており、こちらも等しく尊重しています。つまり私は、人間性に劣らず野生を愛しています」

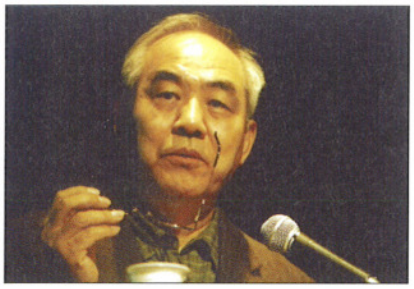
法律があるので、土地を買って勝手に開発することはべつに悪いことではありません。しかし、自分の本当の気持ちは、それは人間にとってよくないことではないか、ということを伝えているわけです。それが正しいのかどうかということを検討するのが「法の上の法」で、ここでは自分の本能を鍛えます。ムササビの赤ちゃんを育てるのと同じように、自分の本能あるいは野生を育てるのに、どうしたらいいか。私たちの趣味としての狩猟とか魚釣りの効用とか、私たちはどうしてそういうことを好むのか、ということが書かれていきます。ここで、そういうことが検討されて、自分の確信をつくっていくことになります。

一二章の「動物の隣人たち」の一文は省略します。

一三章　新築祝い

「私は自分でつくった暖炉の煙突の内側にすすがつくのが楽しみで、歓びと満足をもって暖炉の火を勢いよく燃え立たせました。ひと部屋の家は、いくつもの部屋に分かれたふつうの家のよさが一つにまとまっています。私の部屋は台所であり、寝室であり、客間であり、居間でした。小さな家だからこそ、私は大人と子どもの楽しみ、主人と召使の楽しみ、その他あらゆる家の暮らしの楽しみを満喫できました」

一三章は、今までは「暖房」と訳されていました。森の家がとりあえず住めるようになるのは7月ですが、秋にしっくいを塗って最終的に完成し、そのお祝いの章です。家との交流、「人間にとって家とは何か」ということを検討するわけです。のちの建築家にソローの考えが採り入れられるようになる、ひとつの重要な章です。「家とは何か」ということは、私たちにとっても非常に大きなテーマだと思います。私たちは家を建てることで、ほとんど一生を棒に振るわけですけれども、家とはどういう意味があるかということです。



『森の生活』からソローが見つけた三つのヒント

一四章の「昔の住人と冬の訪問者」、一五章の「冬の動物」、一六章の「冬の池」と、冬の季節に入ります。森の家を訪れる人は少なくなり、そういうときに訪れてくるのは詩人です。しかし、動物たちはどんどん帰ってきます。冬の暮らしを通じて、深い心のつながりのある人たちとの交わりとか、野生の生き物とのふれあいが描かれていまして、『森の生活』のなかでいちばん美しいところだと思います。

一七章　春

「私が森で暮らしたらどんなに楽しいだろう、と想像した理由の一つは、春がやってくるのを知る、豊かで確かな機会と自由で贅沢な時間を持てることでした。ついに池の氷がハチの巣状になると、私は靴の底が氷の面にめり込んで足跡を残すのを感じて散歩しました。私は春の兆しを捕らえようと感覚を研ぎすませます。春の鳥の鳴き声が微かでも聞こえないだろうか、シマリスの地下の食糧庫の貯えも切れ、あの甲高い声が聞こえるかもしれない、それにウッドチャックも冬眠用の巣穴を出たくてうずうずしているはず、巣穴を抜け出るころを見れないか、と期待します」

この本は季節を追っています。四季の変化を楽しむことが人生の大きな楽しみだということで、一七章の、春の精神の高揚のなかで、この本は閉じられます。

一八章　結論

「死んだライオンより、今、生きているイヌが素晴らしいに決まっています。誰もが自分の力で大きくなればいいのです。まずは自分に最善をつくし、あるがままの自分を生きようではありませんか」

一八章は全体としての結論で、これも当たり前のことですが、すべての経験を含めて、「死んだライオンより、今、生きているイヌが素晴らしいに決まっています」といいます。つまり、自分が大事に決まっている、自分が生きていることがいちばんであるということです。昔の人は偉かった、ソローは偉かった、と言っても始まらないわけで、今、生きているイヌがすばらしいに決まっている。だれもが自分の力で大きくなればいい。「まずは自分に最善をつくし、あるがままの自分を生きようではありませんか」ということです。

この本では、芸術家がすばらしい絵を描くことを褒め讃えていますが、それ以上に自分自身を納得のいくように美しくつくっていく作業こそ、最高の芸術ではないか、ということを別の言葉で言い表しているわけです。

それにくっつけるかたちで、「私たちはほとんどいつも決まって、今、取り組んでいる事態を誤解する」と非常に重要な指摘をしています。これが今回の私たちのテーマの「実践」の部分に当たると思います。私たちは、グローバリズムが大事だと言いますけれど、それは正しいのか。それを正しいと思って「そこで生起する出来事を間違って解釈しています」。国際化の時代だから英語を勉強するのが大事だというけれども、英語を勉強することが正しいかどうかわかりませんし、その枠組みも間違えていたら、二重の誤りになります。その誤りから脱出するのは非常に難しい。私たちが今、陥っている問題はそこにあるわけで、今日のテーマもまったく同じだと思います。「持続可能な社会」は、今まで達成されたためしがないのです。そういったことに挑戦すると、正しいように見え、そのうえで、こうすることがいい、と決めていくわけですけれども、それはいいのかどうかということです。

ソローの結論は、「自らの宇宙の、熟達のガイドになろうではありませんか」ということです。自分を知ることが第一ということで、先ほどの結論の言い換えになります。

さらに実践的なことをつけ加え、「“社会の聖なる法(公法)”にもまして人として尊重すべき“法の上の法”があり、それに従うには真の勇気を要します」と言います。私たちの日本語の世界では法とは成文化された法ですけれども、自然の法則は英語では同じ“law”です。ここでいうのは、そういうものも含めた「法」です。ゴルフ場をズラッとつくるより、自然の法に従ったほうがいいかもしれません。

ソローのあと

ソローのあとの時代がどうなったかといいますと、アメリカは土地投機で沸き返りました。先住民から土地を奪い、そこに鉄道がどんどん敷かれていきます。ソローが生きた人生の前半は運河の時代で、後半が鉄道の時代になります。大陸横断鉄道ができて、バッファローなどが皆殺しになり、併せて先住民が虐殺されていきます。そのなかで、土地に投機する大金持ちが出てきて、その結果、『怒りの葡萄』という有名な小説がありますが、オクラホマとかニューメキシコなど、アメリカの中西部に砂嵐が巻き起こります。現在、中国でも起こっていますが、あれは古代からずっと続いていることで、間もなく大変なことになると思います。もうひとつ、ギリシャ文明も砂漠化によって滅びていきます。古代文明は非常に長い時間をかけてそうなりましたが、アメリカはたった50年で、先住民が豊かに暮らしていた大地を、土地投機の結果、砂嵐に巻き込みます。

私が好きな動物作家のシートンの傑作である『オオカミ王ロボ』の舞台になったクレイトンの町で、牧場として買い占めた人が、20世紀に入り、東ヨーロッパからドッと入ってきた新移民に農地として売ります。はっきりいって、だましたのだと思います。何年か経ちますと、牧場と違って、地表を耕しますので、土が表面に出て、そこに風が吹くと、猛烈な砂嵐が起こります。この中に入りますと、人間も家畜も死にますので、オクラホマの住民はカリフォルニアに逃げ、その大変な事態が『怒りの葡萄』という小説として描かれるわけです。

どういう過程でそういうことが起こったかということです。テキサスのパンハンドルという場所で、長さが約500キロあるXIT牧場をイギリス資本が買います。たった一つの牧場ですが、日本を縦断するような広い土地で、これを移民の方たちに売った結果、環境破壊となったのです。

そういう大規模な金儲けが、現代の環境破壊の大きな要因になっていることは明らかです。これをどう調整していくかということですが、アメリカについていえば、こういった国内でやっていたことを、今、世界規模でやっています。日本もそれに参加してやっているわけです。

ソローの結論は、まず「自分を鍛えろ」ということです。こういった事態に対して、世の中の観察して、それではダメではないか、と勇気をもって言えるような人間になろうではないか、というのが『森の生活』の呼びかけです。

そこで彼は、一度、税金を払わずに捕まってコンコードの監獄に入れられます。それが『市民の抵抗』(“Civil Disobedience”)という本になっていますが、そのことについては『森の生活』にも書かれています。彼は、奴隷制を維持するような政府には税金は払わないことが正しい行動だと、自然観察と社会観察のなかから結論的に判断していくわけです。その過程を十分にお話しすることはできませんが、今日お話したことの中で、野生を育むということで連帯することは、その時代にあっては、ちょっと難しかったのだと思います。キリスト教社会のなかで、あえて自分は違う生き方をすると宣言したうえでの話ですので、『森の生活』のなかでは、個人として納得のいく生活をすると結論しているのです。しかし、個人のことだけをやっていたわけではないということを紹介しまして、『森の生活』でソローが言いたかったことを現代に生かしていくことを考えていきたいと思っています。

『ウォールデン―森の生活―』（今泉吉晴訳）より耳よりな話を一章一文

第一章　経済
私は五年を越える歳月を自分の手で働いて生きた経験から、年に六週間ほど働けば、暮らしに必要なあらゆる代価をまかなえることを発見しました。

第二章　どこで、なんのために暮らしたか
私が森で暮らそうと決めたのは、暮らしをつくるもとの事実と真正面から向き合いたい、と心から望んだからでした。

第三章　読書
いったいどれほどの数の人が本に親しむことを通じて、人生を開いたでしょうか。本が、生きることの不思議をとき、新しい生き方を暗示しました。

第四章　音
文字ばかり読んでいては、世界のあらゆる物と出来事が、じかに私たちに語らりかける言葉であることを忘れます。物と出来事こそが最高に豊かな言葉であって、私たちの標準語です。

第五章　独り居
自然にも、私が親しみ、使い込んで自分のものにしているところ、いわば自然から奪って私のものにした領域があります。ではなぜ、私はこの数平方マイルにもおよぶウォールデンの森を、自分が動き回る領域として手にしていられるのでしょうか？

第六章　訪問者たち
私の森の家には椅子が三つありました。ひとつ目は独り居のため、ふたつ目は良き友のため、三つ目はみんなのためでした。

第七章　豆畑
豆作りは、ほかには得がたい楽しみで、私は放蕩になりそうでした。私は畑に肥料を施さず、絶えず鍬を入れ続けるようにしました。

第八章　村
私には、村の全体が、ひとつの巨大な新聞編集室のように見えました。

第九章　池
人間社会とゴシップにつかれると、私は散歩を西へ進め、“新しい森と初めての草地”を訪れ、数日分の貯えをつくったりしました。これらの野生の果実の風味は買って食べる人や、市場のために栽培する人には知りようがありません。

第一〇章　ベイカー農場
時に私は、マツの森へぶらりと散歩に出ました。私の目にマツの森は、壮麗な異教の寺院に見え、あるいは大海原をゆく、帆をいっぱいに広げた商船隊に見えました。堂々たるマツの太枝が風にゆれ、太陽の光を受けてきらきらと輝くさまがあまりにもみごとでした。

第一一章　法の上の法
私は、多くの人と同じように崇高さを求め、精神的に豊かに生きたい、と望む本能が働くのを意識しています。私は、一方で野生の本能が働くのを感じており、こちらも等しく尊重しています。つまり私は、人間性に劣らず野生を愛しています。

第一二章　動物の隣人たち
私たちはなぜ目に見える動物だけを隣人と思うのでしょうか？それでは、私たちと世界をつなぐ動物は、家に住むハツカネズミだけと考えるのと同じです。インドの動物寓話作家、ピルパイとその仲間たちは、動物に“考え”という“荷物”を読者に送り届ける役、つまり荷役動物の役を割り当てています。

第一三章　新築祝い
私は自分でつくった暖炉の煙突の内側にすすがつくのが楽しみで、歓びと満足をもって暖炉の火を勢いよく燃え立たせました。ひと部屋の家は、いくつもの部屋に分かれたふつうの家のよさが一つにまとまっています。私の部屋は台所であり、寝室であり、客間であり、居間でした。小さな家だからこそ、私は大人と子どもの楽しみ、主人と召使の楽しみ、その他あらゆる家の暮らしの楽しみを満喫できました。

第一四章　昔の住民と冬の訪問者
私は陽気にうかれさわぐ吹雪をやり過ごしながら、冬の夜を炉辺で心ゆくまで楽しみました。家の周りでは雪が渦を巻いて激しくふり、フクロウさえ鳴かずに引きこもっていました。私は散歩に出て、何週間も、ほとんど一人も会いませんでした。人の仲間というと、私は昔この森に住んだ人々を呼びさますほかありませんでした。コンコードの町の人の記憶によると、私の家の近くを通る街道ぞいにかつて、大勢の人が住み、笑い声やうわさ話のざわ

めきが聞こえました。人々は街道の脇の森をひらいて小さな家を建て、庭を作っていました。

第一五章　冬の動物

私は、開けた雪原を歩いていてライチョウを飛び立たせたことがよくありますが、それは日没時に森を出て野生のリンゴの木の芽を食べに来ているからです。彼らには夜ごと決まったリンゴの木を訪れる習性があり、狡猾な狩猟家はそんな木で待ち伏せします。森に接する果樹園の被害はかなり深刻です。それでも、私はライチョウが食物をうまく手に入れているのを知ると、嬉しくなります。

第一六章　冬の池

静かな冬の夜が開けました。私は夢で何かを問われ、どう応えようと迷ううちに、目覚め、すっきりしない気分でした。でも、目覚めた私の周りは、生きとし生けるものが暮らす自然の、麗しい夜明けでした。家の窓からのぞく母なる自然は平和に満ち足りていて、彼女の唇はなにも問うてはいない、と私は感じました。私はすでに応えられた問い、つまり本当の世界、母なる自然、太陽の光の中に目覚めていました。

第一七章　春

私が森で暮らしたらどんなに楽しいだろう、と想像した理由の一つは、春がやってくるのを知る、豊かで確かな機会と自由で贅沢な時間を持てることでした。ついに池の氷がハチの巣状になると、私は靴の底が氷の面にめり込んで足跡を残すのを感じて散歩しました。私は春の兆しを捕らえようと感覚を研ぎすませます。春の鳥の鳴き声が微かでも聞こえないだろうか、シマリスの地下の食糧庫の貯えも切れ、あの甲高い鳴き声が聞こえるかもしれない、それにウッドチャックも冬眠用の巣穴を出たくてうずうずしているはず、巣穴を抜け出るころを見えないか、と期待します。

第一八章　結論

死んだライオンより、今、生きているイヌが素晴らしいに決まっています。誰もが自分の力で大きくなればいいのです。まずは自分に最善をつくし、あるがままの自分を生きようではありませんか。

真に持続可能な社会とは何か？

稲本　正

はじめに

今泉さんが話されましたけれど、正直言って今泉さんの本はまだ読みやすいです。だけど、『森の生活』を読んでわかった、という人がいたら手を挙げてほしですけれど、たぶん挙げられないと思います。あれはわからない本なんです。私は60歳ですが、これまでに何回読んだか。私は小説家になろうと思ったんです。佐伯彰一という私のおじさんは有名な英文学者で、ヘミングウェイを日本で最初に訳した人ですけれど、『森の生活』ぐらい読めと言われて読んだんです。でも、正直言ってわからなかった。漱石やドストエフスキーはわかるし、おもしろいんですけれど、『森の生活』は、はっきりいって、おもしろくない。あれを読んで、おもしろいという人はおかしいんじゃないかと思います。今泉さんの本だったらわかります。飯田（実）さんの本もまだわかりますが、それ以前の訳の『森の生活』がわかったら、日本語がわかっていないと言ったほうがいいと思います。それくらい面倒な本です。

ただ、この人はものすごい影響を与えているんです。今泉さんが最後に言われましたが、『市民の反抗』（岩波文庫／"Civil Disobedience"）は、ガンジーがロンドンで読んで、ものすごく感銘を受けて「これでいける」と思って、そのエッセイを携えて南アフリカへ行き、まず運動をやってみるんです。そして、「よし、これはいける」とインドへ行って運動をし、インドを独立させたわけです。

ソローの影響を受けて、いろいろやった人はすごい多いんです。私もそうです。わからないんだけれど、「これはすごそうだ」と思うことがいろいろなところにあります。ガンジーが最初に世界に広めたのだと思いますけれど、それ以外にも、いろいろな人が影響を受けました。環境教育でも、ヨセミテでシエラ・クラブをつくったジョン・ミュアもそうです。

アメリカの歴史はたかだか200年で、私はアメリカへ行って、アメリカ人と論争になって、面倒になると「1400年前に法隆寺ができてね」とすぐ言うんですが、そうすると、「あ、負けた」と言います。本当はネイティヴアメリカンの歴史があるのに、だいたいの人はそれをネグレクトしているから、千何百年前はないわけです。

アメリカの200年の歴史のなかでソローはどの位置にいるかというと、日本でいえば、紫式部と坂本龍馬と夏目漱石と宮沢賢治を足して4で割ったぐらいの人なんです。市民運動の祖であり、環境文学の祖であり、ある意味では哲学的文学の祖であるわけです。

私は『ソローと漱石の森－環境文学のまなざし』という本を書いているのですけれど、夏目漱石をちょっと読んでからソローを読んだほうがいいかと思います。意外と似ていないようで似ているんですよ。今泉さんが「法の上の法」と言われましたが、夏目漱石は最後は「則天去私」と言っています。「私利私欲を離れて、天の法に従いなさい」ということで、その意味ではソローと非常によく似た考え方を持っている人です。

ソローはやっぱり偉い人で、先のことを相当見通しています。今、CO2がものすごく増えていますけれど、「このまま文明がどんどんいってしまったら大変なことになる」とあの時代に言っています。それから、日本の子どもたちは「生きる力」がないといわれていますけれど、そのことはちゃんと見通していて、「このままいくと文明国の子どもは生きる力がなくなる」というようなことも言っています。

私たちがここで議論しなければいけないのは、彼が見通していたとおりの世界になってしまったけれど、それを越えるヒントが『森の生活』のなかにあって、「そのとおりの世界とはいったいどういう世界なのか」「何を越えなければいけないのか」ということを考えなければなりません。

私は私なりに彼の提示した問題を解決するために、オークヴィレッジをつくって、30年、四苦八苦して、今度、トヨタ自動車のバックアップで「トヨタ白川郷自然學校」を4月2日に開校します。なんと52万坪の土地があります。ここで、ソローが『森の生活』できわめて個人的にやったことを、なんとかより多くの人がわかるようなきっかけをつくって、今の環境問題を解決する糸口をつくりたいと思っています。

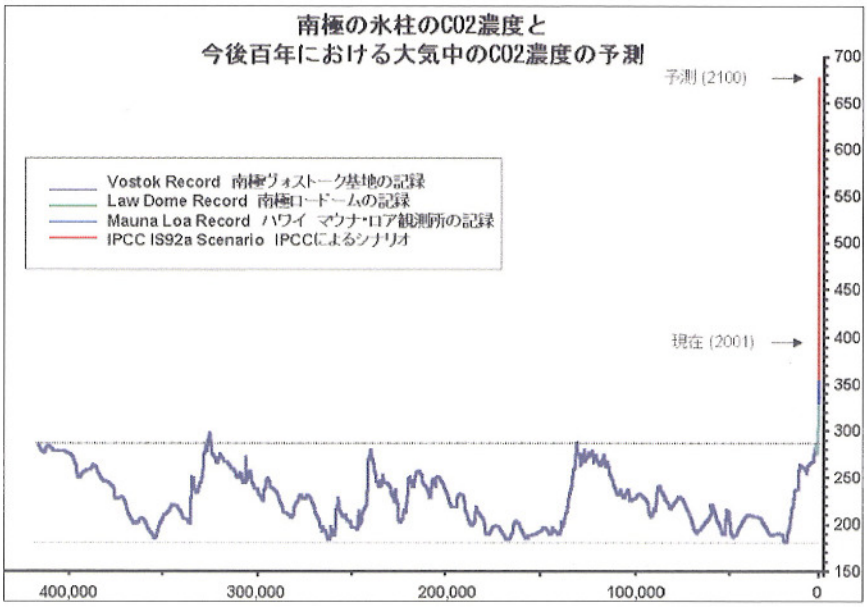
環境問題

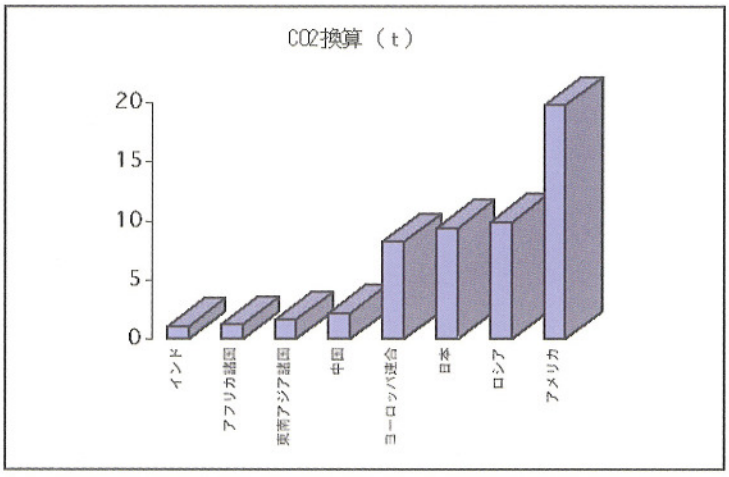
次は有名なグラフです。「京都議定書」が発効され、今、問題になっていますが、40万年前からCO2は180ppmから280ppmの間をいったりきたりして、これが自然だったのです。それが産業革命以降、だいたい380ppmになり、280ppmから100ppm増え、180ppmからは200ppmも増えています。

私は30年前、大学に勤めていましたが、「ローマ報告書」が出たときに、「CO2が増えているんじゃないか」という議論があったのです。大学の先生にそう言ったら、

稲本 正　オークヴィレッジ代表

1945年富山生まれ。工芸家・作家。74年、飛騨に工芸村・オークヴィレッジを設立、代表となる。91年には木工・森林のプロ養成を目指す教育機関「森林たくみ塾」を開設。日本環境教育フォーラム常務理事、林政審議会特別委員、ハンズ大賞 審査員なども務める。著書『ソローと漱石の森』（日本放送出版協会）では、ソローと夏目漱石のゆかりの地を訪ね共通点を洗い出した上で、これからの社会に必要な提言を記している。その他、『森を創る森と語る』（岩波書店）、『森の惑星』（世界文化社）など著書多数。





主要国の一人当たりのCO2排出量

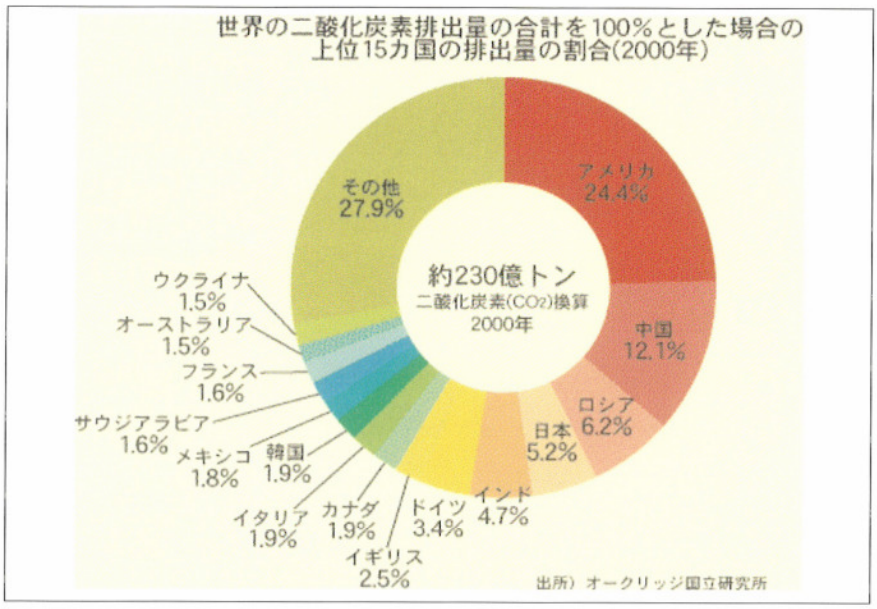
「稲本君、バカなことを言うんじゃないよ。地球は広いんだよ。CO2なんか増えるわけがない」と言う先生が95%ぐらいいたんです。あの先生たちはどこへ行ったのかと思いますけれど、私はこれはダメだと思いました。私はは下っぱでしたから偉い教授は言うことを聞いてくれない。それだったらサンプルを示すしかない。ソローは2年2カ月しか住まなかったけれど、これからの一生は森で生きようと思いまして、山へ入りました。

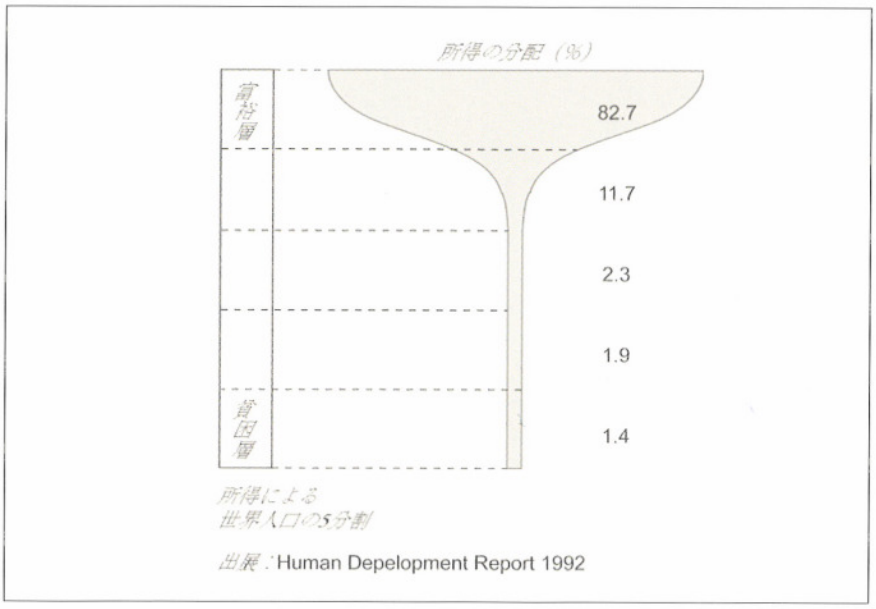
二酸化炭素排出量の割合は、アメリカがトップで24.4%、約4分の1です。このアメリカが京都議定書に入っていません。中国は 2番目で12.1%ですが、途上国ということで京都議定書からは抜けています。3番目のロシア(6.2%)がやっと批准してくれました。日本は4番目(5.2%)ですから、日本の役割がいかに大変かということがわかると思います。ソローの母国であるアメリカをなんとか巻き込まなければダメで、そのためにも、私たちはある解答を示してあげることが重要ではないかと思っています。日本はアメリカや中国に解答を示せる立場にいる、それだけの技術も伝統も自然もある、と私は自負しています。

先日、アフリカで3000万本の木を植えて(グリーンベルト運動)、ノーベル平和賞をもらったワンガリ・マータイさん(ケニアの環境副大臣)と話をしました。彼女は「もったいない」という言葉に非常に感激しているんです。私もマダガスカルやアマゾンや、もちろん日本にも木を植えていますが、写真を見た瞬間にわかって、日本へ来てすぐ「もったいない」がわかった外国人は本物だと思いました。そういう人が出てきているので、可能性はあると思います。だから、アメリカや中国を参加させることが、私たちの今後の任務ではないかと思っています。

CO2の排出量がトータルで多いということは、一人当たりの排出量も多いんです。息子がアメリカにいるのですけれど、自然は好きだし、自然を保護すると言うのだけれど、日々の生活はなっていない。贅沢し放題で「もったいない」がないんです。だからアメリカは一人当たりの排出量（20t近く）も多くなっています。

人間が一人生きているだけで、そのCO2を吸収するのに16本の樹木が要ります。ところが、生活しなければいけない。明かり





があり、スチールの椅子があり、いろいろなものがあって、この椅子をつくるだけで、だいたいCO2を25キロぐらい出しています。純粋の木の椅子だと2.5キロぐらいでいいのですが、そういうふうにCO2をどんどん出します。インドの人は比較的文明を背負っていないので、一人当たり44本の樹木があればいいのです。(日本の文明的な生活の場合は376本、アメリカのかなり文明的な生活の場合は792本)

もっとわかりやすくいうと、世界の富裕層はほんの少しで、それが世界の富の82.7%を持っています。ところが、貧困層は 1.4%の富をみんなで分けています。これを“シャンパングラス”といいますが、地球の文明は非常に危なっかしい形(上からが82.7%、11.7%、2.3%、1.9%、1.4%)になっていることがわかります。こういう形ではいけないということを、ソローは早くに言っています。彼は、黒人の奴隷解放運動で地下組織的な動きを相当しましたし、インディオ(ネイティヴアメリカン)と交流していました。

ソローにかかわる場所

私は何回もウォールデン湖に行きました。夏に行くと、泳ぎにきたおじさんやおばさんがいっぱいいまして、だいぶ俗化しています。ただ、ウォールデン湖を守ろうという「ウォールデンポンド・プロジェクト」があって、アメリカはこういうところはすごいのですが、いざとなると、ものすごいお金が入ります。ドン・ヘンリーという有名な歌手が何億寄付したり、ロバート・レッドフォードやアメリカの俳優たちはけっこう意識が高くて、お金を集めてこれ以上は開発されないことになりました。

ソローはウォールデンばかりにいたわけではありません。町から1.6キロですからすぐ歩いていけるところで、そこに住みながら、いろいろなところを旅しました。「メインの森」とか「コッド岬」にも行き、コッド岬については、すごい景勝地でゆくゆくはアメリカ人の別荘地になって目も当てられなくなるのではないか、と書いていますが、今、そのとおりになっています。ジョン・F・ケネディはソローのファンで、ケネディ家はみんなコッド岬に別荘を持っています。

ソローがアメリカのいちばん東に立ったとき、“All America behind me.”(私の後ろ

にアメリカが全部ある)と言っています。コッド岬での最後の言葉ですが、物理的に考えると、東の端に立って日の出を仰ぐとその影がずっと後ろにかかりますから、アメリカが全部後ろになるということで、私もそこへ行って、彼の言葉を砂浜に書いて記念写真を撮ってきました。

ソローが借りていたことがある宿、コロニアル・インはコンコードでいちばんいい宿で、けっこう高く、2万円ぐらいだったかもしれません。それが今もあって、ほとんど変わっていません。日本が文化を大切にしているかどうかということは、コンコードに行くとよくわかります。コンコードの建物の6割以上がいまだに木造です。

コンコードの同じ町の中にある川で、日本はあのぐらいの町だと三面張りにしますが、その意味では、ちゃんと自然の川にしています。このすぐ近くにノースブリッジがあります。

ソロー家の墓のいちばん端に、「ヘンリー」と書いてある小さい墓があります。私は何回か行っていますが、一度はちょうどソローの命日で、花が飾ってありました。なお、コンコードにはソローの名前をつけた道路があります。

オークヴィレッジ

私は20代から30代になるまでにソローの本を4〜5回読んでいて、よくわからないけれど、これはすごいことだと思いました。それで、やっぱり森で生活しようと思ったのですが、生きていかなければいけないから、木でモノをつくって生活しようと決意して、30年前にオークヴィレッジをつくりました。

別荘分譲に失敗した山のなかの2万5000坪の土地を、メチャクチャ安く買いました。木はほとんどありませんでした。

オークヴィレッジは三つの理念でつくりました。基本的には「持続可能」ということで、ソローは持続可能と明確には言っていませんが彼の考えをベースにして、「100年かかって育った木は100年使えるモノに」「お椀から建物まで」「子ども一人、ドングリ一粒」を理念としています。

ソローは意外とドングリとか森林の遷移に関して研究をしていまして、『森を読む－種子の翼に乗って』(伊藤詔子訳)に出ていますけれど、ある意味で彼は科学者だったわけです。

オークヴィレッジではいろいろなものをつくっていまして、オルトフォン(ORTOFON)のカートリッジや木の楽器、家具も建物もつくっています。

また、国際キリスト教大学のところに苗畑を持っていて、ドングリの会で、その苗を山に植えています。私たちがあの地に入ったときは荒れ地の生活だったので、ここに木を植えました。ソローは豆はきらいで、米が好きだったらしいのですけれど豆を植えていました。ぼくらは米を植えました。しかし、みごと失敗して、農業では食っていけないことが証明されて、急きょ、木を植えました。昔の写真と見比べると25年でどれだけ違うかよくわかります。

ソローと同じように自分の家もつくりました。家の周りに小さい木があります。家の周りの木が25年でものすごく大きくなりました。家の周りだけではなく、富士山とか、いろいろなところに木を植えています。木は育つんです。ソローは明確な植林はしていないのですけれど、ドングリを集めて苗を育てたりしていました。

トヨタ白川郷自然學校

私は60歳になって、新しいことを始めたいと思って、トヨタ自動車と組んでトヨタ白川郷自然學校をつくりました。私は環境派はすごくマイナーですが、マジョリティにならなければダメだと思っているんです。ドイツは徐々にマジョリティになりつつあります。そのためには、いろいろな人と組んで広がっていくということがなければいけないと思っています。マジョリティになるためにはデザインも必要なので、友人の浅葉克己さんにマークをつくってもらいました。

トヨタ白川郷自然學校は、企業と環境NGOと白川村と一緒になってやります。白川村は合併せずに、一村独立で頑張ってくれています。一般に開放し、マジョリティに訴えます。周りの自然で壊れているところを回復させようと思っているんです。

ここの家具はオークヴィレッジがつくりました。レストランでは、なるべく地元の素材を使います。氷見港が近いので、そこの魚も使います。地元は日本料理なので日本料理はご法度ということで、フランス料理を出します。温泉もあります。

私もモノをつくっていたので、もちろんモノづくり工房があります。これは地元の余った材、間伐材のようなものでつくっています。大きい催事ホールもできました。52万坪ありますから、ソローの小屋と同じものを建てて実践したうえで、報告会をやれればいいなと思っています。

白山の麓で52万坪というのは本当に広いです。どれくらい広いかということを説明するときに、「見渡すかぎり全部です」と言える広さです。ところが、その横にトンネル残土があります。建物が建っているところは3〜4ヘクタールしかないのですけれど、目の前に、なんと6ヘクタールの砂漠ができてしまったんです。それで今、木を一生懸命植えています。

絶滅危惧種のギフチョウがいたので、ギフチョウを助ける運動をやります。ほかにもいろいろなハードなプロジェクトがあります。加須良という秘境中の秘境までの道が途絶えていて、そこに行きたいという人がいるのですが、白川郷に住んでいるのに行けない。そこで、昔、蓮如上人が通った道をつくり直すというプロジェクトをやっています。 1日1キロ進む予定でしたが、300メートルも進まなかったんです。なかなかたいへんな仕事です。

環境技術もやらなければいけないので、燃料電池の模型を体験するようなプログラ

ムをやっています。また、合掌造りガイドや不耕起冬期湛水稲作プロジェクト、わら細工などをやっています。それから、白川は養蚕をやっていたのですが、今はやめています。そこで、天蚕といいまして、ナラの葉を食べる緑色の蚕を一生懸命育てています。

私はもう60歳になりましたが、家を建てたのは27～28歳のときで、今のオークヴィレッジの奥に建っています。ソローが建てたソローハットとまったく同じサイズのもので、仲間と一緒に建てて実験的に住んでみましたが、今泉さんが言われたように、現代、こういうところに住むのはなかなか大変です。でも、私の弟子は本当に2年半住みました。それでオークヴィレッジをつくっていって、今、家具をつくっています。

ソローの問題提起

ソローは、精神を高めなければダメだ、いくら文明が発達しても、はたして人間が幸福になっているかどうかあやしい、というようなことを言っています。特に日本の子どもを見ていると、たしかに生物としても弱くなっている。頭はけっこう良いのに、本当にクリエイティブなことをしているのか、本当の喜びは何か、といったとき、どうも危ないのではないか。アマゾンの子どものほうが元気で楽しいんじゃないか。そういう問題提起だと思います。

もう一つ、ソローは環境問題の祖ですから、鉄道が通ったとき、この鉄の魔物みたいなものが世界中に広がると、とんでもないことになると言っていました。それが現実になったわけで、それをどう超えていくか、私たちは叡知を出すべき時期にきているのではないかと思います。万博も「自然の叡知」といっています。

最後に、差別を含めた民主主義の問題というか、ワンガリ・マータイさんも言っていますが、環境運動は平和運動も含めてやらなければいけないわけで、人類の未来を彼が言ったこととどうつないでいくかということは当然課題になると思います。

「実践」はすごく重要で、そのなかでも、個人なり集団なり施設なり、こうやれば成功するというモデルをつくることが何よりも大切だと思います。人類はこれだったら生き延びる、こうやれば本当に豊かになるというモデルです。私は万博の「EXPOエコマネー」にかかわっているのですが、環境に良いことをしたらポイントがもらえて、そのポイントを森林に寄付することもできるし、そのポイントで環境に良いものが自分に戻ってくるという仕掛けをつくっています。

そういうことをやれば、たしかによくなるのです。やればまだできるのですけれど、ただ、もう時間がないのです。2050年を超えると、人類が努力してもダメになるのではないかといわれているのです。これから四半世紀の間、ソローが言ったことをベースにして、私たちがどこまで実践できるかどうかがメドになるのではないかと思っています。

私たちの暮らしと社会をどう観察し、どう変化させてゆくか？

～ソローが考えたようなことを150年たった今、私たちが考える～

パネリスト
今泉吉晴・稲本 正・澤田裕二

進行役
青木将幸（エコのもりセミナー事務局）

青木：「私たちの暮らしと社会をどう観察し、どう変化させてゆくか？」というタイトルで、ソローが考えたようなことを150年経った今、私たちが考えるということで、話を進めていければと考えております。ご登壇いただいているのは、基調講演をいただきました今泉さん、問題提起をいただきました稲本さんと、もうお一方は澤田さんです。

まず、澤田さんのご紹介から始めていこうかと思います。澤田さんは普段、何をやっている人ですか。

澤田：普段は、お二方の先生と違って、展示デザインの仕事をしています。今は「愛・地球博」の催事のディレクションをしています。

『森の生活』を読んで

青木：『森の生活』は読まれましたか。

澤田：昨日、やっと読み終えました。実は青木さんからお話をいただくまで、存在も知らなくて、非常に恥ずかしかったのですが、読書は苦手で、こんな厚い本は『ハリー・ポッター』以来でした。

青木：会場にも『森の生活』を読んでみて、大変苦しかったという方が多くいらっしゃるかもしれませんね。ゲストのお二人も含めて全員にお聞きします。『森の生活』を読んで挫折した経験のある方、どれぐらいいらっしゃいますか。たくさんいらっしゃいますね。最後まで読み切ったという方は？ いらっしゃいますね。これから読もうとする方もいらっしゃるかもしれません。

向こうのテーブルは、30年も前にソローの本を読んで、自らオークヴィレッジをおつくりになったり、山小屋を持ったりして、「森の生活」をすでに実践されている方です。こちらのテーブルは都会のテーブルといいましょうか、普通に都会に暮らしていまして、『森の生活』を読むのが大変だったという視点から、ディスカッションを組み立てていけたらと思っております。

澤田さん、読んでみての感想はいかがですか。

澤田：『森の生活』は、ソローが27歳のときだったというのはすごくびっくりしました。非常に新鮮だったのですけれども、なぜ27歳だったのか、お二方に聞いてみたいと思うのですが、時代がそういう時代だったのかなという気がしています。最近、いろいろな文学賞を非常に若い方がとられているので、もしかしたら日本がソローの時代のようになってきているのかなと思ったということが一つです。

それから、すごく読みにくくて、読んでいて腹が立ちました。「なんだ、このソローってやつは。もっと簡単にわかりやすく言えよ。3行でわかるだろ」と思ったのですが、読んでいくと、私が愛知万博でやっているアートの世界に非常に近いなと思いました。わかりやすいことを直接言葉にして単純に情報として伝えるのではなくて、非常に比喩的に使っていくことで、人間の感情、心に訴える。正確な情報ではないのだけれど、なにか心に訴えて、受けた側がそれを勝手に理解して、イマジネーションを膨らませていくとより深い理解が生まれるというのが、私がやっているイベントアートの世界ですが、もしかするとソローはそのあたりをねらったのではないかなと思いました。アートは非常にわかりにくく

澤田 裕二　株式会社SD代表

1957年東京生まれ。明治大学建築学科卒。博覧会デザイナー・プロデューサー。展示演出デザイナー・プロデューサー。モーターショーなどの大規模イベントや世界リゾート博覧会、山陰・夢みなと博覧会、山口きらら博などのデザイン、プロデュースに関わる。現在、愛知万博の催事ディレクターを担当している。「森の文明」を持つ国である日本から、独自の発信をすべきと考えている。

て、ぼくもあまり好きじゃないんですけれども、そういうことがこの本の特徴かなと思って、最後まで頑張りました。

青木：これはひとつのアートですか。

稲本：ソローはけっこう比喩が多いんです。それはエマソンという先生の影響もあったと思います。友達がいっぱいいて、森の生活をやるときにも、チャニング（ウィリアム・エレリー・チャニング）という友達と一緒に家を建てたりしています。エマソンは有名な人で、漱石のように人を集め、ソローはさしずめ芥川龍之介といったような位置ですね。けっこう若気の至りで、何か新しいことをしたいな、ということはあったんですよ。そういうふうに理解すれば、よくあることじゃないかなという気がします。

青木：27歳でこれを書けてしまったのはそのへんにも理由があるんでしょうか。

稲本：漱石は、大学院のときに『方丈記』を訳しているんです。「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮かぶ泡(うたかた)は、かつ消え、かつ結びて、久しくとどまりたるためし無し」なんて難しいものを、よく英訳したと思うんだけれど、昔の人は早熟だったんですよ。人生は短くて、50歳ぐらいで死ぬんだから、27歳といえば半分過ぎているわけです。

青木：不思議ではなかったという感じなんですね。

稲本：私がオークヴィレッジをつくったのは同じ27～28歳ですけれど、これを読んで負けちゃダメだと思いましたね。やらなきゃ時間がないだろう、と思っていました。

青木：この会場の参加者は、女性は20代がいちばん多く、男性も20代が多いのですけれど、近い世代の人間がここまでやるというのはちょっと焦りますね。

稲本：特に女性が多いというのは、日本の男はヤバイな、女のほうがあてになるなと思う。うちの会社も若干そんな傾向があります、ぜひ女性も頑張ってほしいと思います。

今、自然学校は全国にあるんです。いくつか質問があって、ちょっと答えきれないものもあるんですが、オークヴィレッジなりトヨタ白川郷自然學校では実習生をとっているので、そういうところで具体的に実践してみたほうが答えになるようなことが多いような気がします。ここで答えてもしょうがないな、という質問がけっこう多い。だけど、やる気があるのは、すごくいいことだと思いました。

青木：今泉さん、初めて『森の生活』に出会った瞬間のことは覚えていらっしゃると思いますけれど、おいくつぐらいのことで、どういうふうに感じましたか。

今泉：学生のときだったと思いますけれども、「森の生活」という題に憧れましたね。すばらしい本があるな、と思いましたけれども、読んでみたらちょっと読めなかったんです。あまり楽しくないと思いました。でも、今、自分で訳して、訳す意味があるなと思ったのは英語で読んでみたら楽しかったからです。

学生のときから自分で訳してみようと思うまでに40年ぐらい経過しましたが、それはどうしてかというと、私は動物学をやっていますので、英文学の方がこんなにちゃんと訳せないとは知らなくて、もともとつまらない本なんだろうと思っていたからなんです。あるとき、たまたま英文で読んでみましたら、狩りのことなどが出てきて、とても楽しい話で、それでやってみようと思ったんです。そういうことで、物事には時間がかかるというのが私の感想です。

ソローがアーティストであることは間違いないのですけれども、今、読む側のわれわれの場合、学問が分業化され、ものすごく分割されていまして、動物学といったって動物学をまるごとできる人は1人もいません。たぶん動物学を学んでも、イヌの本なんか書けないでしょう。そのくらい分割されて、ネズミの専門家とかモグラの専門家とか、さらにその生態とか、ものすごく細かいわけです。ですから、学者はほとんどソローの本は読めないと思います。ソローは暮らしのレベルで見ていますのでね。

卒論をやる前の学生が、「森」について卒論を書きたいと言ったら、大学の先生に「そんなもの、まるごと扱ったら、どうなる。もっとテーマを絞れ」と怒られますけれども、むしろ「森全体を扱いたい」というほうが正常なわけです。大きな認識を得たいというのは当たり前ですけれども、学問の世界では扱えなくなっています。それに対する批判としてソローを読まなければいけないので、私たち自身が大学で頭をダメにされているわけです。読めないというのは「読書人」じゃないからです。普段、読書している人は、ソローを楽しく読めると思います。それは年齢に関係ないです。

「観察」について

青木：今日のディスカッションは、前半と後半でテーマを絞りながらやっていこうと考えています。前半は「観察」をとりあげていきたいと思います。「じっくり観る」ということをソローはやってきたわけですが、150年経った今、それぞれのゲストは、この社会をどういうふうに観ているのかということを、ぜひ伺っていきたいと思っています。

後半は「実践」ということで、たくさん質問をいただきました。「森の生活」を今、実践するにはどうしたらいいのか、という質問が多く寄せられていますので、このへんの課題に立ち入っていきたいと思っています。

澤田さん、愛知万博の仕事をしていらっしゃるなかで、ニホンザルが登場してくるという話を聞いたことがあるんですが。

澤田：万博の会場は非常に起伏が多くて、ため池もいっぱいあって、そのいちばん大きな池で、毎日、ナイトイベントをやります。大きな水循環の一部でもあるのですけれども、その水中から高さ15メートルのニホンザルの頭が出てくるんです。これは、びっくりさせようということもあるんですが、演出家はアメリカのロバート・ウイルソンという方で、この方がニホンザルがいいと提案されたのです。先進工業国でサルがいちばんたくさんいるのは日本だというんです。それと、人間だけで物事を考えているから文明はおかしくなるので、「人間が自然から見られているという視点」を持てば、もっとバランスがとれるんじゃないか、というのが彼の主張です。私たちはニホンザルに見られている、毛が3本足りない、知恵を持った自然が人間の活動を見ている、というわけです。皆さんが「見られている」ということを、イベントのなかで再確認して、それを心に刻んで帰ってもらいたいというのが万博からのメッセージで、そのためのナイトイベントが毎日、夜、行われます。

青木：人間が自然界から観察されていることの象徴として。

澤田：そうです。ソローもそんなようなことを言っていますけれども、人間だけが見るのではなくて、人間が見られているという視点が重要だということです。

青木：よくわかりました。「観察」について、今泉さんにお伺いしたいのですが。ソローはものすごく観察をしましたね。アリのたたかいをじっくりと観察していますけれども、同時に、人間の生き方とか社会のあり方、働き方、どれだけお金をもらって、どれだけ苦労しているのか、というと

ころも観察したのだと思います。ソローにとって、観察はどういう意味があったのでしょうか。

今泉：観察というのは、モノを見るということですけれども、モノは見ようとしても全体は見えないわけですね。ですから、観察とは、足跡が一つあったら、そこにカワウソが来たとか、「大きな全体をイメージしていく作業」です。

ソローは、毎日4時間の散歩をしたといいますけれども、すごいことですよね。歩きながら楽しむことは、たいへんな頭の活動、精神活動でして、それを繰り返していくことで世界を知っていくということですから、その楽しみには非常なものがあります。ウォールデンにいたときの話ですが、ソローの場合、ひとつは自然に向かってする森の散歩、もうひとつは村に向かってする散歩で、村の散歩では、ちょうどプレリードックを観察するように人間を観察する、と言っています。まさにサルが見るのと同じようなことです。ですから、非常に大きな「人間的な精神活動」が観察で、世界が人間にいろいろな暗示を与えてくれるということだと思います。

ですから、都会でも「森の散歩」はできるわけで、森の痕跡はあちこちにありますね。並木の下にいろいろな種が育って、死んでいきますけれども、それは大変なことです。一本のケヤキの木が何万という種をばらまき、良い場所に育ったものは4月に生えてきますけれども、5年、10年経った木は1本もありませんよね。そういうふうに、モノは見れば見えてきて、生物の生きざまが大きくイメージされる。そういうことだと思います。

青木：なるほど。稲本さん、観察することはすごく大事なことだと思いますが。

稲本：私は『ソローと漱石の森』で書いていますから、省略しますけれど、デカルトは大きな間違いをした人で、「観察は人間側からしかできない」というのに近いことを言っているんです。「神」がいて、「人間の理性」があって、「理性ではない肉体」があって、そして「自然」がある、というふうに完全に分けた人ですけれど、あるときから人間は観察を理性でするものだと思い込んだ。それである程度はできるけれど、ある程度以上のことはできないということがわかってきました。

今、科学でも進化論がすごく問題になっていて、人間がいちばん進化していると思い込んでいたのですけれど、ひょっとしたら生物のなかでいちばん進化しているのは昆虫じゃないかと言う人がいるんです。よくいわれますが、ノミが人間の大きさになると、東京都庁なんて軽く飛ぶんですよ。アゲハチョウはマイナス193度でも生きているんです。モナークチョウというレイチェル・カーソンが好きだったチョウは3500キロ飛ぶんです。人間は35キロを歩くだけでも大変ですよ。だから、あれが人間の大きさになれば、地球を楽に一周できるんです。

そういうふうに、私たちが知らない価値観が相当いっぱいあったということで、対象として観察していくうちに、ずっと中へ入っていって、向こうから見直してみたら、全然違うものが見えてきたというのが、現代科学です。デカルトによると、あくまでもこっち側にいたわけです。アインシュタインの相対論をすごく難しく考えている人がいるけれど、「物事は相対的でしかなくて、相手からも見直してみる」ということですね。

デカルトもニュートンも、なんのことはない、一神教のキリスト教徒で、ある絶対の神がいて、そのもとで永遠に人類は発展できると思い込んでいた人です。でも、地球は完全に有限だし、宇宙だって有限ですね。地球が危ないという人がいるけれど、地球なんて全然危なくない。人間が滅んでしまえば、ほかの生物がゆっくり生きられるだけの話です。そういうことをもう一回よく考え直してみることです。実のところ、ソローはそこまで言っているんですよ。そこが普通の科学者と違うところです。

私が大学を辞めたのも、はっきりいえば、大学の先生の8～9割はわかっていないからです。分析的にやってきた科学がどこまでできたかということです。近代合理主義による非常な分裂主義で、それでいて市場拡大主義になっていって、環境問題を起こしている。これは哲学的なレベルで、もはや問題なんですよ。これをソローはわかっていたし、漱石もわかっていたんです。それなのに次の科学者たちがわからない。私も科学をやっていたんですが、多少ましだったから、27歳のときに悟ったんです。私は原子物理学者で、バカでもなかったんですよ。世が世なら、ずっとあそこにいれば……。でも、辞めてよかった。なぜかというと、原子力をやっている私の友達は四苦八苦していますよ。

青木：従来の観察の仕方、分析の仕方、ものの捉え方が、今、ものすごい限界にきているように聞こえてきますけれど。

稲本：きていると思いますね。相対論がわかっていないからです。ニュートン力学はすごく狭い世界でしか正しくないということがわかっていない。デカルトもある範囲内では正しいけれど、地球とか宇宙とか、今の社会現象を全部見ると、正しくない。進化論も、強いやつだけが勝ち抜くというのがある解釈ですが、強いやつだけが勝ち抜いたら、種は多様にならないはずですよ。ところが、生物は圧倒的に多様になっていっている。ということは、「共生進化」といって、こっちも勝つし、こっちも勝つんです。だから、トヨタもあまり勝ってはいけないんですよね。偉いのは、日産にハイブリッドを提供したことです。

青木：三菱自動車をサポートしたりとか。

稲本：これは共生進化ですよ。生物社会もみんなそれでやっているわけです。「競争進化から共生進化へ」という観察までいけるかどうかが問題だという気がしているんです。

青木：「観察」というキーワードで、ずっと聞いてきていますが、澤田さん、今のこの時代をどういうふうに観察しているんですか。

澤田：私はあまり思想を語る人間ではなく、思想を人にどうわかりやすく伝えるかということを一生懸命工夫する側ですから、この人たちは何に反応しているんだろうか、ということをじっと見ているわけです。今、大衆はこういうものに反応している、この人はこういうふうに反応する、こっちにちょっとフェイントをかけて、こうやると反応しやすい、ということをずっと見たりしています。

環境の話では、『ソトコト』という雑誌があって、最近、駅の売店に置かれるようになりました。ということは、一般の娯楽として、スタイルがカッコいい、それにお金を払おう、という一般の雑誌に近い感覚が出てきたわけです。この会場が若い人でいっぱいになっている現象も、それに近いのではないか。じわじわとそういうところにきているのではないかと見ています。

青木：ソローは150年前のアメリカの社会を観察したわけですけれど、日本の今の社会をどういうふうに観察していらっしゃいますか。今泉さんは、暮らしにくいな、と思っていらっしゃるかもしれませんが。

今泉：それはもう大変な社会ですね。私は1940年生まれで、戦後しばらくは日本は世界の最貧国でしたから、こういうふうにな

るとは全然予測しておりませんでした。小学校のときに習ったのは、もっと牧歌的な平和な国になるという話でした。ですから、私は異様な感じを持っています。

一方で、最近はインターネットがあるし、航空運賃が安くなって、日本から外国に自由に行けるようになりました。都留市の大学に着任した20年前は、とても文献が少なくて、ソローを読むことは夢のまた夢で、自然科学の研究でも文献にはとても困った時代でした。それが、ここ何年かで、あっという間に開けまして、日本にいても外国の本は自由に買えるようになりました。ついこの間までは、洋書を買うにしても紀伊国屋さんに注文すると、3カ月ぐらい経って、ありません、と言ってくるわけです。日本の読書環境は非常に悪かったのです。今は自在に手に入ります。

そういうふうにグローバリゼーションはものすごいですね。そういう意味では、グローバリゼーションの全体としての非常に悲惨なことと併せて、先進国はものすごい利益を得ているという一端がそういうことだと思います。世界中から情報を得られるので、読書環境は抜群によくなって、私が想像しなかったような仕事ができるようになりました。ソローを訳すことはそのひとつですが、仕事がひとつ増えたということです。世界の経済は猛烈な混ざり合いの時代で、いまだかつてない時代に突入していると思います。

青木：稲本さん、いかがでしょう。

稲本：今の時代はダメだとか大変だと言っても問題はなにも解決しないわけで、ダメなのはわかりきっているのですけれど、私は「なぜ日本人はここまで自信を喪失したか」ということが不思議なんです。環境から見ると、江戸時代までは世界で最も環境のよい国だったわけですし、明治に入っても、自然に対して「草木一本でも大切にしましょう」という思想はものすごく持っていたわけですよ。それから、工業製品があれだけになったのも、木工とか漆とか陶器の技術をものすごく持っていたからだと思います。

グローバリズムだけれども、欧米人と同じ主体性を持とうとしているところに間違いがあると思うんです。彼らは戦いばかりしていた人たちで、日本は島国で、戦ってこなかったんですよ。ドイツ人と話すと、論理的にガンガン攻めてくるけれど、日本では「理屈ではわかりますけれどね」と言ったら、断りの文句なんです。「理屈ではわかりますけれど、私はしない」と言ってもいいわけです。欧米人と話して「理屈ではわかりますけれどね」と言って、「しない」と言ったら、あなたはバカかウソつきだと言われる。

私は、「腑に落ちなければやらない」というのもひとつの主体性だと思う。自然との関係で言うと「じねん」という考え方を持っていたからです。日本人は「自然のなかに自分がいる」と思っている。欧米人に「あなたは自然の一部ですか」と聞かれた場合、日本人の多くは「私も自然の一部です」と言うんですよ。そうすると、「あなたはサルか。人間だろう。人間は自然の一部じゃない」と言われるのは決まりきっているんです。デカルトたちが決めたんだから。ネイティヴアメリカンなどでもないかぎり、人間は自然の一部ではない。だから人間なんですよ。

そのへんの主体性のあり方が違うということを明確に意識すべきだと思う。日本の民主主義は欧米の民主主義と同じであるべきではないんです。根回しをしながら話してもいい。共生進化は、たぶん日本人がすごくうまくて、21世紀から22世紀にかけて環境問題を考えていくときに、日本はイニシアチブをとれると思うんです。主体を考えるとき、自分だけのことを考えないで、相手を慮る。「もったいない」「慮る」という発想はすごく大切です。これは共生進化しようというもので、それがない欧米人に対して、「あなたたちは足りないんだ」と言ってあげればいい。ところが、日本人は「自分が悪かった」とすぐ謝ってしまう。そこをひっくり返して自信を持つことです。ただ、日本人が自信が持つためには、日本の文化なり歴史なりをしっかり勉強したほうがいいと思う。

青木：澤田さんも、そもそも日本という国は文明が違う、ということもおっしゃっていましたね。

澤田：「森の文明」という話をよくするのですけれど、小麦をつくっていた文化と稲作をしていた文化は決定的に違って、稲作は労働集約性が高くないと、なかなかうまくいかない。ところが、小麦は蒔けばできる。私はつくったことがないからよくはわからないのですが、土地がどのくらいあるかということが重要な問題で、森は邪魔なわけです。そこを攻めとって、みんな奴隷にしてバーッと蒔かせれば、どんどん収量が増える。そういうふうにどんどん外に向かっていく世界で、人は森林をどんどん食いつぶしていった。それに対して、日本は農業でやっていくわけですから、「理屈はわかるけどもなあ」と言いつつ、共同体を維持していく。この二つの違いがあって、たまたまヤギがいたり、いなかったりというなかで、森の文化を維持してきた。世界の中で森の文化を維持しているのは、先進工業国では日本だけで、中国もほとんど違うといわれています。

そのなかでいちばん違う感覚は、「ユートピア」と「桃源郷」という言葉にあります。欧米人にとって、ユートピアは外の世界にあって、自分の世界にない。だから、どんどん外に行くことによってユートピアを実現するということで、それが宇宙開発につながってくるし、どんどん外に出ていくことになる。ところが、日本人にとっての桃源郷は、住んでいる村の中にあったり、自分の内側にあるということだと思うんです。

観察についても、外を観察するのではなくて、自分の村を見て、その中に何があるのかを見て、それを再評価していくわけです。それを自分の中の価値観に置き換えてそれで満足する。そのなかに自分の理想郷を求めていこうとします。

地球の「つきあたり」がないと思っている人はいないと思いますが、今まで小麦をつくっている人は、あるということを前提には考えていなかったわけです。ところが、日本人は中に理想郷をつくることをずっと考えてきましたから、そういう人たちが、今、「つきあたり」のなかで何を発信しようとするのかということは大事な話だし、世界は待っていると思います。

しかし、そこでちょっと矛盾があるのは、日本人は議論下手だから「皆さんがおっしゃるのはそうだけれど、私はそうは思わないんだけれど」となって言い返さないけれども、言い返すようになると国民性が変わって、アメリカ人と同じになっちゃうということです。そのへんがやや難しいところです。

話はズレますが、広告の世界でグループミーティングをよくやります。マジックミラーの後ろに人がいて、「この製品をどう思いますか」と、男性と女性を分けて聞きますと、男性と女性でいちばん違うのは、男性は製品を出している側を慮って「なかなか良い製品ですね」とまず誉めて、おもむろに「でも、ここが四角いのは、私はあまり好きじゃない。非常にいいんだけれど、私はこれがちょっと……」と言う。女

性は、いきなり「あたし、きらい、これは」と言う。まず自分がどう思うかというスタートなんです。どっちがいいのかという問題はあるのですが、主張ははっきりしている。稲本さんが、女性は頼りがいがあるけれど男性は、と言うのは、そこにあると思うんです。

日本のジレンマはそういうところがすごくあって、あるところは日本の男性のように、「まあまあ、そうだよな。うちの課長もちょっとアホやけど、しょうがないな」という世界と、「いやなものはいや。きらいなものはきらい」と言いきってしまう女性の世界とあって、重要なところで、どちらにいくんだろうと葛藤しているような感じがしますね。

青木：観察ということで聞いてきました。日本が共生した時代、木工が盛んで、手に力もあった時代から、戦後、だんだん変化して、貧しい時代から豊かな時代になってくるなかで、グローバリズムがものすごく進んでいると感じることもあれば、そのなかで環境についてやっていこうという意欲も見えてきている。ただ、日本人はちょっと自信がないのか、と思えるようなところが出てきています。もっと自信をもって日本の文明とか歴史をしっかり観察して、社会に発信していくことが大事なのではないか。そういうふうに聞きとれました。

今泉：「日本特殊論」みたいになってきていますけれども、ソローの言葉でいえば「物と出来事が世界の標準語」で、ヨーロッパの人でもアジアの人でもどこの人でも、自然が好きな人はお互いに通じるところがあるという意味だと思うのです。直接観察して、そこから受ける印象は、人間であるかぎり共感できるものだということで通じるのだと思うのです。

ソローも、ヨーロッパの思想だけではなく、中国とかインド、アジアの思想に非常に関心を持って、むしろ日本人よりずっとそういう思想に通じていました。そのときのもとは「自然観察からくる普遍的な目」ではないかと私は理解しています。

青木：自然をゆっくりじっくり観察して、歴史をひもといていけば、どの民族、どの国の人であっても、同じような共通の価値観にたどりつけるかもしれない。

今泉：それが「物と出来事が世界の標準語」という意味で、標準語とは世界に通用するという意味だと思います。

稲本：補足ですが。アングロサクソンの人たちとスタンスは違うのですけれど、まったく通じないかというと、今、言われたように、ソローは西の文化から東の文化に架け橋を架けようとし続けた人なんですよ。それで、私は漱石と比較したんです。漱石は江戸っ子で、日本人独特の感性を持ってロンドンに留学して、パリ万博を見て、いたく感動するんです。でも、やっぱりちょっと違うなと思った。だから、彼はひたすら東洋から西洋へ橋を架けようとしたんです。本当は出会っていればよかったのだけれど、ソローのほうが先に死んで、漱石はあとだったんですけれどね。

私はアメリカの環境団体ともよく話すのですが、アメリカの団体の優秀な人はほとんど東洋思想です。「ディープ・エコロジー」はみんなそうなりつつある。だいたい日本食を食べるのがステータスで、「日本食、食べてないの？」と言う。週に3日食べるのが環境派なんですよ。それから、日本のものをいっぱい持っていますよ。彼らは、漆がジャパンだと知っているから、ジャパニーズは漆を持っているものだと思い込んでいるんです。ところが、日本の人は持っていない。だから、変なことが出てきてね。ヨーロッパとかアメリカの環境派で親日派は、日本の禅をよく勉強していますが、なぜか日本人は自分たちのことを勉強しない。だから、ソローを勉強して、もう一回、日本に戻ってくればいいと思う。そういう意味で、今泉さんが言われたように、人種を超えてつなぐようなものは徐々にできている。これは環境がつないでいると思います。

澤田：万博で来るアーティストは、お箸を使うのがうまいですよ。日本の若い人は変な使い方をしている。

稲本：日本の若い子より親日家のほうが圧倒的にうまい。ぼくよりうまい人がいっぱいいるもの。

澤田：気を使って、お刺し身を食べさせたら、その店がイタリア料理風にアレンジしてオイルをかけたんです。そしたら、イタリア人が怒りまして、「おれは刺し身に醤油をかけて食いたい！」と日本人をしかりつけていました。

稲本：アメリカの環境局の局長あたりは盆栽を持っていますよ。

青木：内なる自然の桃源郷みたいな意味合いなんですかね。

澤田：「つきあたり」にきているということを実感しますね。日本人は何を考えるのか、日本の文化のなかに何かを見つけたい、という思いがものすごく強い。

さっき、ロバート・ウイルソンの話をしましたけれども、日本庭園でローリー・アンダーソンがコラボレーションをするんですが、彼女は「私はブディストです」と仏典を持ってきて、それを日本人は全部知っていると思って話をするわけです。それをベースに、私は日本庭園をこう考えましたという話をする。まさに彼女ら、彼らは日本にそれを探しにきているという感じがします。

「実践」について

青木：観察から実践に移っていきたいと思いますが、質問がたくさんきています。「森の生活を都会でもするヒントはありますか」という質問をいただいていますが、盆栽はその一つのスタイルかもしれませんね。その他に質問がきていると思いますので、今泉さん、稲本さん、お願いします。

今泉：「稲本さんは木工等で経済活動を支えているけれども、今泉さんは野生生物系でどうするんですか」という質問があります。この答えは二つありまして、一つはソローのように生きればいいわけです。野生生物系は意外にお金になりまして、私自身がお金を稼いでいるわけではないのですが、畑をつくるより野生生物の写真を撮るほうが、たぶんお金になります。たとえば、サルの写真を1枚撮れば3万円で売れたりしますけれども、畑をつくっていてはちょっと大変です。これは単純に今の日本の経済状況について言っていまして、そういう不思議な経済状況です。

しかし、根本的な仕事として、野生生物を観察してどうするんだということについては、ソローは1849年頃、ウォールデン池の暮らしを終えて、『森の生活』を実際に書いているときに、「もの書きとして生きることに決めた」と言っています。それは、森の生活を都会に住んでいる人たちに伝えるという仕事です。

そのことは動物物語作家のシートンも言っています。開拓者として入った土地は畑にしていかなければなりませんが、そのままにしておいて、そこで見た野生生物と仲良く暮らしている先住民の暮らしを伝える。アメリカですから、西部を東部に伝えて生きていく。まさに環境教育とはそういう暮らしです。それは必要だと思います。

稲本：おもしろい質問があります。「みんなが森の生活を始めたら、森はみんな壊れて、なくなってしまうのではないか」というのですが、壊れないんですね。里山がわ

かっていないんだと思うんですけれど、日本人のやり方は何が違うかというと、「森を豊かにしながら生活する術」をつくったのは日本人で、これが里山なんです。アマゾンには里山はないんです。原生林か土地しかない。アメリカもほとんどそうです。

ソローも「原生の森」と言っていて、コンコードが里山かどうか、ちょっとあぶない。当時、農業をやりすぎてコンコードまで相当壊れていたんですよ。ソローは若干問題だと常に思っていたんだけれど、あの時代、近代合理主義はそうですが、自然をなにしろ克服していこうとしたんです。ところが、日本人は三内丸山の時代、縄文の時代から、自然と一緒にやっていこうということで、ウルシの木もクリの木も植えていたんです。クリの木を植えて、クリを食べながら1000年生きたんです。1000年てすごいですよ。

オークヴィレッジに来てもらえばいいので、この質問をした人はぜひ来てください。別荘分譲に失敗した、まったくの荒れ地に木を植えて生きているわけです。そして、家具をつくったらその分、植えるということをやり続けています。だから、持続可能かどうかということが問題なんです。

今泉：私も「日本人すべてが森で生活したら、環境はどうなるのでしょうか」という質問を受けていますが、これは困るという意味でしょうか。それは全然心配は要りません。稲本さんが言われるのとは逆の意味で、まず、だれも入りませんね。30年ぐらいは大丈夫です。

トヨタさんには悪いけれども、車を買わずに、あるいは、今の車で10年我慢して、次の車を買うおカネで森を買われたらいいと思います。私は車をやめまして、何台分かの土地を買って、どんどん増やしていますけれど、車1台分で自分の理想の森を買えます。それはユートピアです。キリスト教とか信仰の世界では、ユートピアは死んでから行きますが、ソローの世界では、それはすぐ隣にある。すばらしい自然をユートピアとしてとらえているわけです。

今の日本ではそれが買えます。私が子どものときは、買うのは不可能だと思いました。当時、日本の農業は健全で、農地を手放す人なんかいるはずがないと思っていました。ですから、手に入れるのは私の生涯の仕事でしたが、最近は農業は破産続きですね。私は、岩手である破産農家の土地をそのまま買いましたが、それは裁判所の差押え物件です。そういうものは山のようにありますけれど、応札する人はだれもいません。そのときも私以外にはだれもいなくて、ぜひやってくれと農協から頼まれました。もちろん頼まれなくても私は喜んで買いますけれど、そういう状況なんです。

青木：そのぐらいで買える範囲のものなんですね。車だったら、みんな、一生のなかで何度も買うと思いますが。

今泉：たしかに車は美しくてよいけれども、別の意味で森も非常に美しい。

アレックス・カーという美術評論家が何十年か前に日本に来て、祖谷(いや)の山奥の森と一緒に日本家屋を買って、生涯の仕事として、それを美しく変えていくということを学生のときに決断したんです。すごいなと思った。私がその話を学生のときに知っていたら、森を買ったと思います。私は、「森を買うんだよ」と学生に毎回言っていますけれど、実行したのは二人です。

青木：二人もいればすごいですね。

今泉：二人いれば、すごいのかもしれませんね。

稲本：具体的にいうと、坪2000円です。今はちょっと高くなりましたけれど。だから、車を買いつつ土地を買うことができるんですよ。

「都会に住んではいけないんですか」という質問がありますが、それはいいと思っています。私はしょっちゅう都会に出てきています。みんなが森に住まなければいけないということはないんですよ。住もうと思えば住めるし、住みたい人は住めばいい。問題は、6%のCO_2の削減に8%足されたから14%削減しなければいけないということで、とりあえずは、そのためにはどうすればいいかを考えればいいんです。

青木：都会に住んでいてもいいから。

稲本：そう。14%削減するためには、どうすればいいか。どんどん電気を使っているけれど、もう少し減らすとか、環境に良い車やモノを使う。それから、最低、自分が吸うのに必要な16本の樹木を植える。できれば300本植えましょう。300本以上植えれば、いくら酸素を吸ってもいいんです。CO_2をいくら出してもいいということではないけれども、ツーペイしているわけです。だから、都会に住みながらもたまに植林に行くとか、皆さんに環境教育をしてあげるとか、そういう生活をすればいいんです。簡単なことでは、ドングリを一粒でいいから植える。それから、この水の向こうには森がある、この水が飲めるのは森があるからだということを理解すれば、都会で生活していいと思うんです。

青木：いつかは森の生活をしてみたいと思っている方は、どれぐらいいますか。けっこう多いですね。都会に住んでもいい、と言われつつも、たくさんいます。そこで、こういう質問もきています。「私は都会に住んでいますけれど、いつかは職業として自然の再生をしたり、森の中に入っていこうという気持ちがあります。でも、なんとなく田舎に行きにくいというか、自然に入っていくのが怖い。今の生活が捨てられないのではないかという恐れのなかで、なかなか出ていけない」。

稲本さんは、28歳のときに東京から飛騨に移り住み、今泉さんも阿佐ヶ谷出身で、そこから田舎に行く瞬間があったと思うのですけれど、そのときは怖くはなかったですか。

稲本：行けるかどうか実験をする。何だってそうですよ。ちょっとやってみて、行けると思えばやるわけです。若い人でも、歳をとってからでも可能で、トライアルしてみればいいんですよ。車でも燃料電池というのはトライアルです。常にトライアルすることが大切です。

私は大学で物理の先生をしていて、これはダメだと思って、まず旅行したんです。旅行をしているうちに、長野県の美麻村に小屋を建てたいなと思って、大学に勤めながら休みごとに行って、小屋を建てていたわけです。そしたら、大工が「おまえ、筋がいいからプロになれるよ」と言ったんです。そこまでは訓練と実験をし続けて、自分で自信を高めていくしかしょうがない。

ソローもハーヴァード大学を出てから、学校の先生を3日ぐらいやって、いやになって、すぐ辞めてしまうんです。それで、やっぱり彼はウォールデンに行ったりして、いろいろトライアルしているんですね。だから、だれでも訓練して、トライアルして、あるところまでいけそうだなと思えば、実行すればいい。

それから、特殊技術を持っていなければ絶対ダメだと思うんです。今泉さんは、持っていなさそうな顔をしているけれど、特殊技術をすごい持っているんですよ。ちゃんと訳せるし、動物学をやっている。私も木工の腕はこれでもいいんです。何か持っていなければいけない。

武者小路実篤の「新しい村」はダメだなと思ったのは、よく調べてみると、みんな、武者小路さんにぶら下がろうと思っているんです。そういうやつはダメなの。漆

を塗ることでもいいし、図面を書けるのもいいし、自分の技術があることです。田舎でもインターネットで高速に何かができる。うちにもいるけれど、CGのできるデザイナーはすごい重要なんです。どんな田舎にいたって、すぐニューヨークに送れるわけです。特殊技術を持つことが重要だと思います。

今泉：まったくそのとおりだと思いますけれども、多くの人はもうちょっと単純なことで、夜の森を歩くのが怖いとか、そういうことだと思います。よく学生から聞くのですけれど、森を歩いていると後ろから何かがつけてくるような気がするとか、最初は怖いらしいんです。私は初めのころを忘れてしまうんですけれど、私は杉並に育って、中学のころは高尾山によく行きました。夜、一人で歩いていると、その頃は高尾山でもけっこう怖くて、そういう感じを持ちましたけれど、動物は、その怖いはずの森を歩いていますね。ノネズミは元気にやっていますし、ムササビは自在に飛んでいますし、動物は怖がっていない。そう思うと、すっと怖くなくなります。それでも、夜のお墓を歩くのは、けっこう怖いと思います。

青木：それは怖いですね。

今泉：私はムササビの観察で真夜中にそういうところへ出かけますけれど、もともと持っている人間の正直な気持ちで、やっぱり怖いですね。でも、都会もとても怖いと思いますね。自動車のことばかり言いますけれど、いちばん怖いのは自動車でして、どこから飛んでくるかわからない。クマはそばを通っても全然怖くありませんが、自動車はパンクしたら、こっちへ来るわけです。特に国道を歩いていると怖いですね。そういうことをリアルに考えていくと、自然は決して怖くないし、怖いと感じる自分も愛しい。

しかし、森を買って、都会で暮らしていた者がそこで堂々と生きられるかというと、地元に方にはしょっちゅう笑われるようなことばかりです。つきあって10年経って、自分は森とこういうふうにつきあえる、この木についてもこうできる、ということがわかってくる。だから、10年、20年

とかかるわけで、そういう意味で、環境教育はそんなに簡単ではないと思っています。そういうことをパッと伝えたからといってわかることではないので、すべての人が森を経験しなければ森についてわからないのだとしたら、大変な事業ですよね。それはつくづく思います。

青木：自分の技術を持とう、トライアルしてみよう、というアドバイスがありましたが、「若者がそういう方向に行くためには、バックアップしてくれる大人たちの役割も大事だと思います」とか「森に行きやすい社会の制度や経済の仕組みがあるといい」というご意見もいただいています。それについては、どう思われますか。

稲本：そんなことは必要はないですよ。自分でやればいいだけのことだと思います。アルバイトして、ちょっとお金を貯めれば田舎ではそんなにお金は要らないんですよ。だから、本気になってやればいいと思うんです。たぶん自信がない。それと、大人たちが「やっちゃいけない」というプレッシャーをかけていることがよくない。それがいちばん怖いと思う。

青木：都会を離れて、年収が下がってはダメとか。

稲本：そうそう。今泉さんが言われたことを忘れていたんだけれど、私も最初は夜の森を歩くのは怖かったんです。ところが、田舎の森をある程度歩いてから都会へ来たら、都会ほど怖いものはないと思ってね。だから、慣れなんだよね。

もうひとつ困ったのは、うちの若い子も私もさいなまれるのは、田舎へ行ってやることがメインから離れているんじゃないか、社会から取り残されるんじゃないか、という思いです。ただ、皆さんが持たなければいけないのは、時代の変換期には主流にいるだけではダメだという考えです。

たとえば、陸上に上がったアカンサススステガという両生類は、サカナの落ちこぼれだったんです。マグロは百何キロで泳ぎますけれど、それに対して、うまく泳げなかったやつが川の端の浅いところにいて、そのうち水がなくなって、川で生きられなくなって陸に上がったんです。逃げに逃げて、結局、陸上に上がって、陸上で新しい世界をつくった。進化の歴史を見ると、けっこうそういうものが多い。

だから、変化の時代にあっては、森へ行ったり新しいことをする人を、日本全体としてバックアップする必要はないわけで、「そういう人がいてもいい」とみんなが思うことです。そういう人が新しい時代を築くかもしれない。

トヨタさんがエコのもりセミナーとかトヨタ白川郷自然學校をバックアップしているのは、したたかなんだな。自動車の本流にいるんだけれど、ヤバイかもしれないと思っている人がいるんですよ。だれも行かないような山の中でやっていたら、ひょっとしたら良いことがあるかもしれないと、私たちは放し飼いにされているんだけれど、本当にひょっとしたら、そうなんですよ。日本はそういうことを認める社会ではないことが問題で、世界的にはけっこう認めているんですよ。

青木：そんな人もいるよ、ということを認めない。家族とか親戚に、そういう人がいると、ひどい言われようですからね。

稲本：それを認める。さっきの、マジョリティになれるかどうかという話も、そう簡単にはマジョリティになれないけれど、マイノリティというか、イノベーターというか、新しい人が出てきたらそこに閉じ込めておこうという発想が危険だと思う。

青木：実践していこうということで、こういう質問もきています。「私は、週末は里山保全活動をやっています。できるだけ森にも出かけて、森の木を使う市民活動をやっている人間です。でも、それだけやっていても、持続可能な社会にならないのではないかと不安に思っています。どうやったら、都会で暮らす普通の人、一人ひとりの市民の心のありように変化を与えることができるのでしょうか」。同様に「価値観の変換の必要性とか、パラダイムシフトが大事だとか、考え方を変えようとか、ものの観察の仕方を変えようとか、そういうことはわかるけれども、マンションの隣に住むニイチャン、ネエチャン、オジサン、オバサンにどう伝えていけばいいのか」という質問が多数寄せられています。

澤田：私は環境の専門家じゃないので、本質とは違うのかもしれませんが。さっき、『ソトコト』がだんだん売れるようになったという話をしましたけれど、要するに、カッコいいと思われればいい。お金が儲かったり、システムに乗るようになればいいと思うんです。「みんなで修験者のように我慢して、良いことをしましょう」と言ってもダイエットにすぐ負けてしまうように、我慢できないんだと思うんです。人間の本能は生命を維持するために自然から与えられたもので、それに負けてしまうんですね。そうすると、それを刺激しつつ、なおかつ環境を良化するようなかたちにビジネスのパラダイムシフトをしないとダメなんじゃないか。カッコいいものを得ると、豊かな気分になるから、モノが買いたくなって、トヨタ自動車を買ってしまうけれども、そういう循環がしっかりできるように

私たちの暮らしと社会をどう観察し、どう変化させてゆくか？

なればいいんじゃないかと思うんです。具体的に何か、といわれると、なかなか難しいのですが、環境を守ろう、CO2を出すのをやめようと言っても、かなり限界があるだろうと思います。それよりも、言い方はおかしいけれども、人間の本能とか射倖心を刺激することが環境を守ることに直結するように考えればいいのではないかと思います。トヨタも、いつまでも車をつくっていないんじゃないか。ビッグビジネスになっていただけるといいんじゃないかと思っています。

稲本：成功例が出てくると変わるんですよ。オスカーをもらう人たちは、アメリカのデカイ車に乗っていくのはカッコ悪くて、プリウスに乗ってきているんですよ。これは時代の変換です。

うちは経済活動をちゃんとしながら、日本、アマゾン、マダガスカルで木を植えて、万博にも協力していますけれど、うちは出しているCO2をほとんど吸収するだけの森をつくっているんです。カーボンバランスをちゃんととっている企業はカッコいい。今やそこまできているんですよ。

メジャーになるのは難しいという話ですけれど、日本人の意識はどんどん上がってきていて、カーボンバラスとかLCA（Life Cycle Assessment）にものすごく敏感になっている。あそこが出しているものは、本当に環境にいいのか悪いのかということをチェックするようになってきていますから、これは目の前にきていると思います。環境に良いことをしている会社しか生き延びることができなくなりつつある時代なんですよ。経済活動と環境が完全にドッキングしつつあるなかで、よりシビアになってきているわけです。トヨタさんもハイブリッドに頼らないで、次はハイブリッドと燃料電池を結びつけなければいけない。これもけっこう真剣に考えていると思います。そういう時代になってきているので、もうすぐいけるんじゃないかという感じが若干しています。

今泉：そういうことはみんな大事だと思いますけれども、ある一部の人はまた別の危機感を持って、いろいろな危機感を持ってやることがいいと思うんいです。日本は、少なくとも戦争前まで、今のお年寄りが若かった頃は、すべて有機農業でやっていました。その手応えはお年寄りが知っているわけです。それから、農家は「食物工場」で、味噌から何からみんなつくっていたわけです。それをそのまま再現することはありませんけれども、その感触とか、そこからくるいろいろな考え方は、お年寄りの中にあります。先ほど、どういうことをしたらいいか、若者がそういうことをしたら支援するといった話がありましたが、日本中でそういうことをやらなければ、あと数年経ったらほとんどできなくなりますね。

私が住んでいる都留市では、冬に湧き水を田んぼに引いて、その中で菜っ葉をつくる水かけ菜という栽培方法があるんですけれども、その担い手はほとんど75歳を超えています。そこに落ち葉を運んでいけば堆肥になって、さらに良いかたちでできるのに、若者はたくさんいてもだれもそんなことをする人はいません。

そういうことが日本中で起こっていますから、いろいろカッコいいこともありますけれど、そういうことに気がついたら、やることしかない。そうしないと、そういうものをよみがえらせたり、後世に伝えていく精神は途絶える。世代の交代という意味で、非常に危機的な状況にあるのではないでしょうか。

稲本：それも言われるとおりで、うちは「森林たくみ塾」で有機の農業を30年やっているんです。私はうちへ来た若い子に「日本人のくせに自分の米ぐらい自分でつくらなくてはダメだ」と言っているんです。米をつくるとおもしろいんだよね。コシヒカリがどうのこうのより、自分でつくった米はやっぱりおいしい。それから、籾殻で保存したほうがおいしい。食べる前に籾殻をとって、何分搗きにするかは自分の好みでやる。

そういうことは、まだまだできるんです。いっぱい田んぼが余っているんですよ。環境教育は、感性で気づかせるということはもちろんあるけれど、「実践」がテーマだと思うのでトヨタ白川郷自然學校でもやろうと思っているんですが、現実に農業をやったり、間伐材で家具をつくったりする。ソローもそれをやろうとしたわけですが、この時代にもできる可能性があるんです。これこそ環境教育です。環境教育が机の上の観念になってしまっているので、生活の中でやらなければダメだという気がしています。

澤田：豊かさとは何だろうかというときに、東京では何でも手に入る気がするけれども、東京の人がいちばん貧しい生活をしているんだろうと思うんです。

私は2001年に山口で博覧会のお手伝いをして、3年間ぐらい通い続けて、山の多い生活と東京の生活の間で行ったり来たりしていたんです。東京に3日ぐらいいると飽きて、山口に行くと山がいっぱいあっていいと思うけれど山も飽きて、飽きた頃に東京に戻る。非常にいい生活を3年間していたのですけれど、そのときにすごく感じたのは、山口は食材が豊かで、安くて、人情味があって、いろいろな話をしながら、おいしいものが食べられる。心にも体にも非常に良い生活ができるということです。東京へ帰ってくると、全くそういう生活ができない。日曜日に遊びにいこうと思うと、すごい渋滞の中を我慢していかなければいけないけれども、山口の人はそんなことはない。どちらが人間として豊かで良いのだろうかと考えると、やっぱり山口のほうが良いのではないかというように、ひとつのスケールにのせて測っていく必要があるんじゃないかという気がします。

本当に心の豊かなことはなんだろうか。ビールを飲む前に汗をかいたらおいしいけれども、そのために車に乗って、ウェイトトレーニングに行って、お金と電気を使ってはいけない。知らず知らずに持っているものを手から放してみる。引き算をすることが重要な気がしています。私が着ているものもそうで、持っていて当たり前だと思っていますが、意外となくても済むものがあるような気がしています。それを手から一つひとつ外してみる。そういうなかにおもしろいものがあるんじゃないかという気がします。

青木：実践をしていくうえでは、何かを手放していくと同時に、何かを自分の手に取り戻していくような感覚がありますね。一見、便利そうなものを一回手放して、もう一回、自分の手でつくったり、かかわったりする。ほかの人と一緒に、食べ物や住む場所や家具などをつくり直していく作業を実践していく必要があるんだろうなと、聞いていて感じました。

「観察と実践」というテーマでお話ししてきました。まだ答えきれていない質問はありますか。

稲本：いちばん多いのは「どこから始めたらいいか」という質問です。どこからでも始められるので、精神性を高めることから始めやすい人はそうすればいいと思います。

東京に住んでいても、うちは三鷹のICUに苗畑を持っていて、百数十坪で1万本ぐらいの苗が育つんです。多いときは2週間に1回は集まって、苗を育て、育ったやつを山へ持っていって植える。みんな、ボラ

ンティアでやっているんです。苗ばかりじゃいやだと、子どもたちがときどきジャガイモやサツマイモを植えています。農業、林業を、半分遊びながら楽しくできるんですよ。

ここに集まられた人も、インターネットなどで探せば、情報はいっぱいあるので、始めたいことが何か見つかると思います。あまり考えないで、今泉さんの訳した本は珍しくわかりやすい『森の生活』ですから、本を読むのもいいし、それでもわからなかったら、私の『ソローと漱石の森』を読んでいただければ絶対わかるように書いてあります。小さいテーマから見つけていくとどんどん階段を上がるように行けると思います。

全員が変わらなければいけないと思っている人がいるんですけれど、変わる必要はないんですよ。トヨタ自動車でも、本当に働いている人は2～3割です。オークヴィレッジでもそうです。本気で命を賭けて会社のためにやろうなんていうやつは2割ぐらいしかない。でも、1～2割がそうなると社会は変わる。ドイツの緑の党だって、大していないけれど、やる気になっているやつがちゃんといる。生物もそうで、ミツバチも方針を決めるのは1～2割で、どの集団でも5割は付和雷同派です。皆さんがリーダーシップをとろうと思ったら、1～2割になるということで、なりたい人はどんどんやればいいし、無理はしないという人は、ちょっと良い側の付和雷同派になるということで、これから時代はいやでも変わっていくんじゃないかという気がします。

ただ、世の中の方向性があるんです。最初の一歩はほんのちょっぴりで、それがダダダッと悪くいく。また、良い方向に一歩いくと良くなるんです。私はオークヴィレッジを30年もやっていて、それがわかるんです。40～50人のグループがちょっと良い方向にいくと、みんなが良くなる。一時、農業なんかやめよう、自分が生きている間に使えない木を植えるのはやめようという雰囲気があって、だれも植えなかった時期があったんです。ところが、またあるとき植えようと言い始めて植えて、だんだん大きくなったら、みんなが喜んで植えるようになった。だから、「最初にどこに向かうか」ということが、特に今、重要なときで、万博も含めて、環境のほうにちょっとシフトし始めると、いけるんじゃないかなという気がしています。

青木：本気になる1～2割になろうということですね。ソローも、自分が正しいと思う生き方、自分が信じる生き方をやっていこう、と言っていますが、それに本気でぶつかっていく。あの人がやっていない、この人がやっていない、と言わないで、自分がやっていくことがすごく大事なんだろうと思います。

最後に今泉さん、澤田さんからも一言ずついただきましょう。

今泉：最後に、ソローが私たちに示してくれている三つのヒントをお話ししたいと思います。一つは「自分を鍛え、自分の感覚を楽しませる」ということです。経験に基づいた裏付けのある知識で自分をしっかりさせていく。経験は楽しいからするわけですから、感覚を楽しませるということで、これは「快楽主義者」とも訳されていますけれども、経験を楽しむということだと思います。

もう一つ、ソローは森の家に「三つの椅子」を用意していましたが、それは社会に対するスタンスです。一つは自分のための椅子、もう一つは友達、友情のための椅子、もう一つは社会、みんなのための椅子、と言っています。本当に三つ用意していたんです。

あともう一つは、その他たくさんということで、どの文章も非常にすばらしい言葉で満ちているので、どれもヒントになるのではないかと思います。

澤田：ある企業の開発をやっている知人が、こういうことを言っています。若い人がこの実験をやりたい、こういう研究をやりたいと言ったときに、それは前にやって失敗したからやめろと言う主任研究員がいちばん悪い。失敗したら、その人はその中から何かを学ぶ。その学んだことが重要で、失敗させない研究者はどんどんダメになっていく。そういうことだと思います。

どこから始めればいいのか、ということより、「どこからでもいいから実践してみること」が重要なんだろうと思います。私たちも含め、教えられることに慣れてしまって、なんでもかんでもセットされて、教科書的に教えられて、これが成功する法則だと言われてしまうから失敗が怖くてできないということがあると思うんです。なんでも実践してみることが大事だと思います。そして、そこからフィードバックして自分としての意見を持つことが大事で、それぞれが意見をしっかり持って、みんなが違う意見であることをちゃんと認めあって、ひとつの社会ができるということが大事だと思います。

実体験をしてみるという意味で、私の専門のイベントは非常に役に立っていまして、クリスマスは非常にいいイベントです。世界中の人が同じ日に参加するイベントはクリスマスぐらいしかない。日本だけですが、バレンタインデーもそうです。環境に関しても「アースデー」がありますが、カッコよかったり、みんなが気持ち良いイベントをもう少し積極的に使っていって、いろいろな側面でいろいろな人がカジュアルに考えられるイベントができたらいいなという気がしています。

青木：ありがとうございました。観察と実践ということでお話しいただきました。これまでの議論で、観察の場合、人間の側だけの視点で観察をするのではなくて、自然の側からわれわれはどう見られているのか、という違った視点での観察を入れていこうということです。あるいは、時間軸を持って、長い時間の中でどういう意味があるんだろうかという観察の目を持って生きていきたいというふうに感じました。

実践に関しても、いろいろ挙げられました。いろいろなことができます。自分自身が納得して生きていくために、持続可能な社会をつくっていくためには、車1台買うのを延ばしてという話もありましたけれども、自分の森を持つことも大事ですし、週末に森の手入れに出かけることも大事です。日常の都会の生活で、家具一つ選ぶこともまた大事だったりします。ドングリ一つからでも実践できるということです。

一気に森に引っ越して生活をするのは怖いところもあります。でも、自分がスタートを切る1割になっていく。そういうメッセージを受け取っていただければと思います。必ずしも今すぐできるわけではないと思います。その時期はその人の中に生まれてくるのだと思いますが、失敗を恐れず、ソローの教えを生かしながら、自分たちを鍛えながら、良い生活を一緒に築いていきましょう。

エコのもりセミナーとは
～森づくりから始まる人づくり、まちづくり～

「エコのもりセミナー」はトヨタ自動車株式会社と社団法人日本環境教育フォーラムの共催事業です。「森づくり」をテーマにした1998年からの3年間を第1期とし、それを受けて2001年8月からスタートした第2期は、「21世紀の里山づくり」を目指してきました。新しい視点を盛り込んだ人材育成キャンプ「里山インタープリターズキャンプ2」、森と親しむプログラム「森遊び倶楽部」などを開催しました。その様子は「通信えこのもり」および「ウェブサイト」でご覧いただけます。

◇エコのもりセミナーウェブサイト　http://eco.goo.ne.jp/education/eco_seminar/

エコのもりシンポジウム2005　持続可能な社会は『森の生活』から
～「観察」と「実践」 ソローのメッセージ～　報告書

発行日：2005年3月31日
発　行：トヨタ自動車株式会社・社団法人日本環境教育フォーラム
編　集：エコのもりセミナー事務局
〒167-0032　東京都杉並区天沼3-3-17-201　ワークショップ・ミュー内
TEL.03-3220-3132　FAX.03-3220-3133